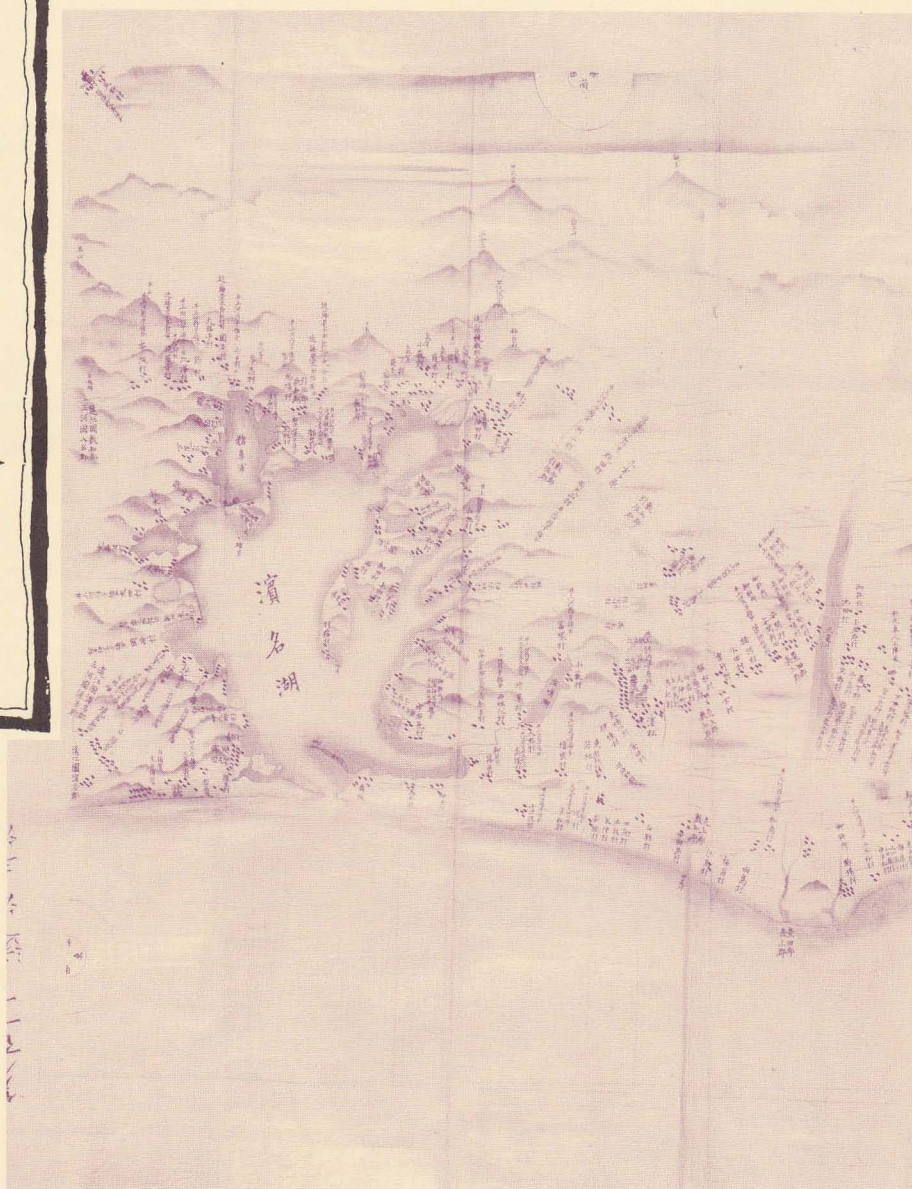


史料と伊能図



# 伊能忠敬

研究



二〇〇九年 第五五号

伊能忠敬研究会

## 伊能大図 第111号 遠江三河(部分)

浜名湖は図の西端部分に描かれている。米国議会図書館所蔵の大図のうちで数少ない、山野に彩色が施された着色図の一つで、その中でも最も美しい写図である。山野の着色だけでなく、米国議会図書館所蔵図ではほとんど省略されている知行所、領所の注記が忠実に写されているのが特色である。しかし、山を飾る木立は見られず、原図では屋根の連なりで表現されている村落が「黒抹」記号に変えられている点は一般の議会図書館図と共通する。コンパスローズは輪郭だけで着色がない。

浜名湖は南端の今切口で遠州灘と通じる汽水湖で、湖面の面積は国内第十位だが、一見してわかるとおり、猪鼻湖(浦)のほか、引佐細江(北東端)・庄内湾(東岸、庄内半島で湖本体と区画)など、湖岸線は入り組んでいて、百キロをこえるその延長は全国第三位である。その湖岸を赤い測線が丁寧にめぐっている。浜松城下との間にある佐(左)鳴湖を含む湖岸が測量されたのは、文化二年(一八〇五)の第五次紀伊・四国沿岸測量の途上である。三月一六日(西暦四月一五日)浜松城下泊から二九日の新居宿出発まで十三泊という期間を周回測量にあてている。気賀、新居両関所の役人との折衝を織り交ぜつつ、日々の測量はほぼ二手に手分けして着実に進む。東南端、弁天島の対岸にあたる宇布見村辺については「海岸道路悪ク塩濱多二付、測量大二手間取」とあり、地図では砂浜の黄色が際立つ。弁天島と遠州灘沿岸は享和三年(一八〇三)の第四次東海道・北陸、浜松から北に向かい気賀街道を御油へ抜ける道筋は文化五年(一八〇八)の九州第一回測量往路の測量による。伊能忠敬記念館に気賀街道を描く二枚続きの大図がある。

鈴木純子(題字は伊能忠敬の筆跡)

## 目次

55号

## 巻頭

## 話題Ⅰ

史跡探訪5「伊能忠敬測量之地碑」

井上 辰男

一

丑年にちなんだ地名

斎藤 仁

二

忠敬先生の年賀状

編 集 部

三

富岡八幡宮で復元「伊能大図」フロア展

編 集 部

四

伊能ウオークー〇周年記念の集い

編 集 部

五

岐阜で見つかった伊能測量関係史料

編 集 部

六

## 話題Ⅱ

研修旅行「御手洗・中島・呉」

矢能 彰

九

伊能大図総覧の地名と景観(九)

星 埜 由尚

一二

## 芳名録

伊能 陽子

二四

## 研究ノート

伊能測量隊の銚子の止宿は醤油醸造家

佐久間達夫

二六

伊能忠敬研究(五)川崎まで歩く!その一

石谷 春香

三〇

菅茶山の詩について

編 集 部

三八

佐倉「歴博」寄託柏木家文書

柏木 隆雄

三九

伊能忠敬測量の能率と安全対策か?

佐久間達夫

四八

## 伊能塾講座

伊能家とご縁がありまして

伊能 陽子

五六

私の伊能図発見史

渡辺 一郎

六〇

学習院伊能中図を見直す

斎藤 仁

六四

## 九州支部だより

平成二〇年度九州支部研修旅行

中富 道利

七〇

## 忠敬談話室

例会案内

新沢 義博

七一

お便りから 日々の話題 お知らせ

編 集 部

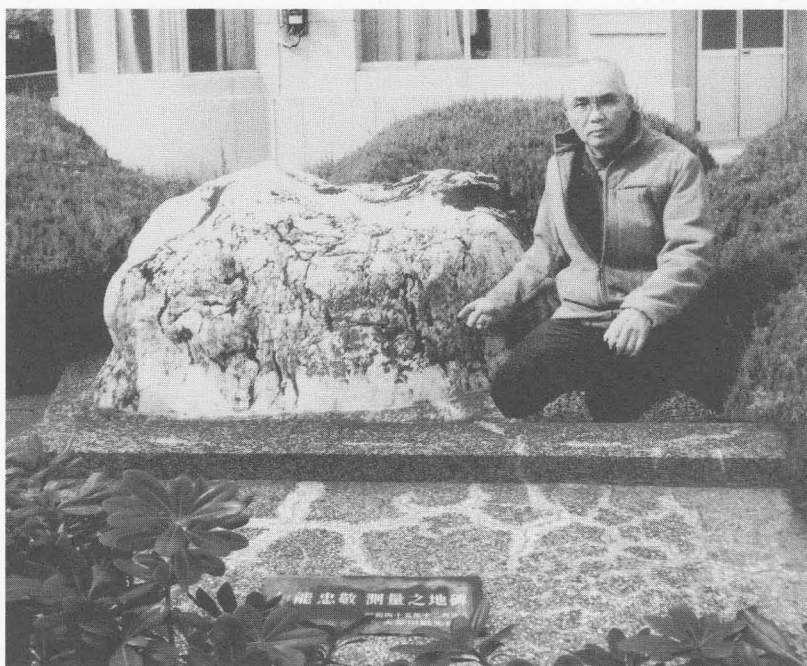
七二

表紙図解説 鈴木純子



## 史跡探訪5 伊能忠敬測量之地碑

◇所在地 福岡県大牟田市筑町公園内 ◇設立者 大牟田観光協会  
◇設立年月日 一九七〇（昭和四十五）年十二月◇設立経緯 伊能忠敬  
測量隊が実測した地点に忠敬の偉業を後世に伝えるため碑を設置した。



碑は長さ150cm、巾70cm、高さ70cmの自然石に「伊能忠敬測量之地」と右より彫り込まれている。位置は、緯度33度2分6.6秒、経度130度26分53.6秒

## 伊能図の魅力にひきこまれて

### 案内人

福岡県朝倉郡在住 井上辰男

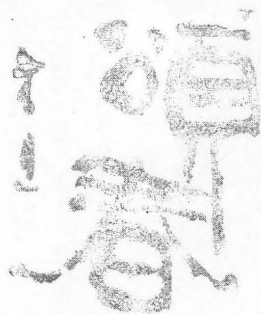
私も測量業務に携わってはや、四十三年が過ぎた。最初に伊能図と出会ったのは、武揚堂の伊能中図の縮小版であった。伊能図は日本地図として、また美術品としての価値も充分あり、いつまで見ても飽きがないものであった。その後、インターネットにて伊能忠敬研究会があることがわかり入会した。

江戸東京博物館の伊能図展を初めとして、東京国立博物館、伊能忠敬記念館、神戸市立博物館、松浦史料博物館等を見学したが、なかでも松浦史料博物館で見せていただいた伊能大図は、間近にルーペで見ることができ、墨の光沢・色彩のあでやかさが、強く印象として残っている。

伊能大図（模写を含む）もほぼ全面揃っている現在、これらを利用して、より詳しい伊能忠敬測量の足跡を探索して行きたいと思うこの頃である。

さて、今回紹介する記念碑は、九州第二次・伊能忠敬測量日記の文化九年一〇月一六日に「大牟田川土橋六間」の記述がある箇所、福岡県の南部、炭鉱都市で有名だった大牟田市にあり、JR鹿児島本線大牟田駅より、国道二〇八号を久留米方面に約八〇〇m、徒歩で約一〇分の旧柳河藩と三池郡御領所の境、大牟田川沿いの公園内にある。

（いのうえ たつお・日本測量協会測量技術センター九州支所次長）



慶

2009(平成21)年  
丑(牛)に因んだ地名

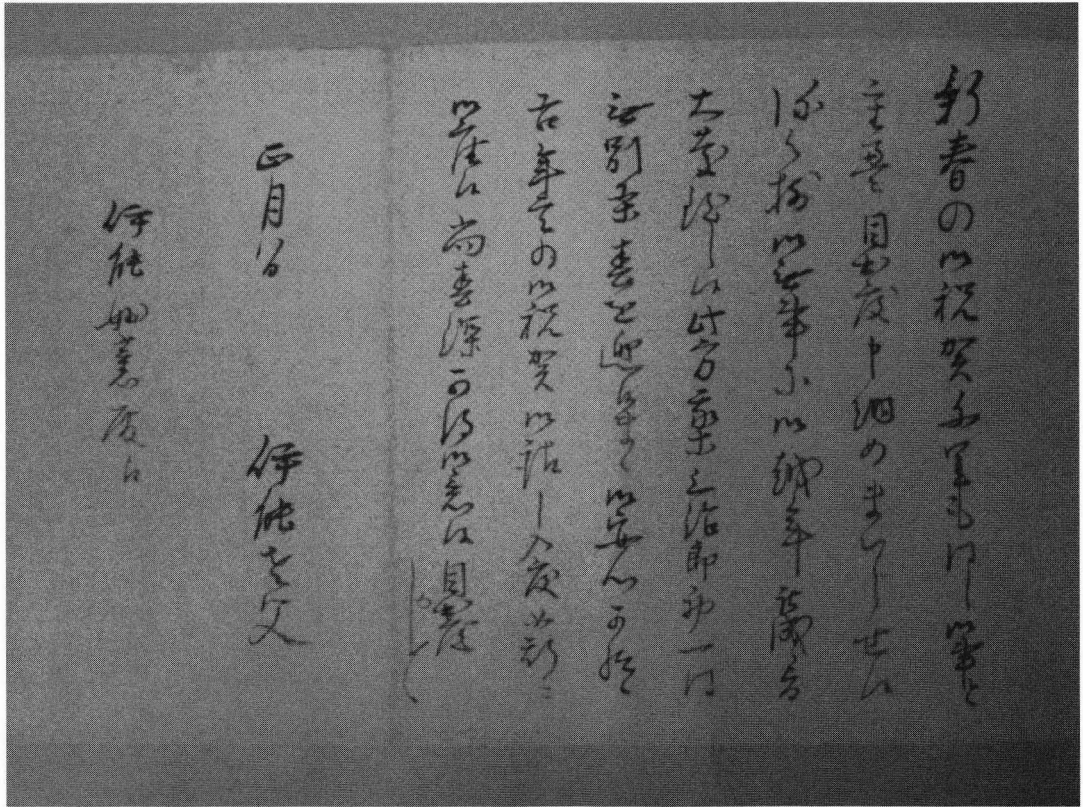
土

豊

斎藤 仁(さいとう ひとし)・学習院名誉



# 丑年生まれ 忠敬先生の丑年の年賀状



「伊能忠敬書簡第2巻1（1月8日）」

伊能忠敬記念館蔵

新春の御祝賀千里も同じ御事と  
重畳目出度申納めまいらせ候

弥御揃い御無事に御越年被成候旨

大慶致し候、此の方我等三治郎初一同

無別糸春を迎候まゝ御安心可給候

右年首の御祝賀御請申入度、如斯二

御座候、尚春深可得御意候、目出度

かしこ

正月八日

伊能老父

伊能妙薫殿江

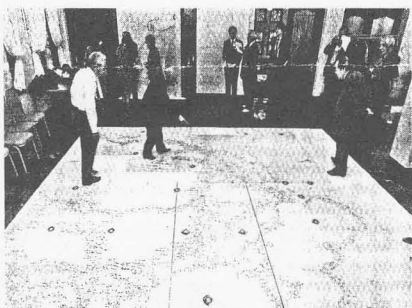
\* \* \* \* \*

この年賀状は忠敬が江戸から佐原の妙薫あてに出したものである。この年賀の挨拶につづいて「・・年を取七十二才二候而、達者二相成申候、御悦可被成候」とあることから、忠敬七十二歳の文化十四年（一八一七）丑年の賀状と考えられる。伊能忠敬は延享二年（一七四五）丑年、正月十一日の生まれ。存命ならば今年二六四歳の年男である。丑年生まれの人は「堅実で忍耐強くマイペース、強情・頑固で時として激情に走る。内面に強い剛毅を秘めている半面細かい神経質な一面も持っている」とのこと。忠敬先生の性格を言い当てているだろうか。（なお会報第35号に「忠敬の年賀状——文化十年正月二日——藤岡健夫氏蔵」が掲載されています。併せてご覧ください。）

# 伊能図フロア展開催

今春四月から開催される「完全復元伊能大図等全国巡回フロア展」で公開される伊能大図の原寸復元パネルが富岡八幡宮で公開され、新聞各社の紙面で報道された。このフロアパネルは、伊能図をデジタルデータ化し、1m×2m大のウレタン製マットに再現したもの。二七〇枚すべてが完成すると『大日本沿海輿地全図』（伊能大図）を原寸大（縦約50m×横約46m）の大きさに再現できる。今回発表されたパネルは国会図書館大図の関東部分を縦4m×横5mに再現したもの。「忠敬の名前は知っていても、実際に地図を見た人は少ないはず。一人でも多くの人に見てもらおう機会になれば」伊能洋氏の談話が掲載された。

## 原寸大 伊能図を披露



伊能大図を復元したフロアパネル

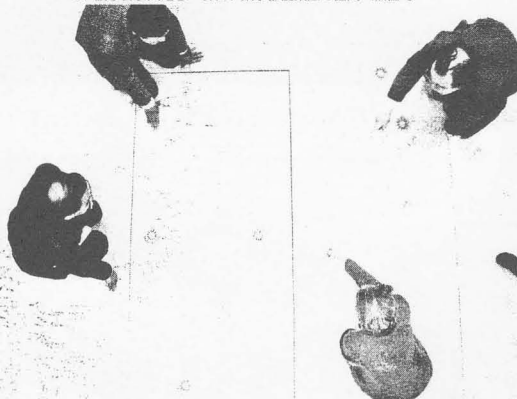
江戸時代後期の測量家、伊能忠敬が作製した「大日本沿海輿地全図（伊能図）」を原寸大復元したフロアパ

ネルの一部が18日、伊能ゆかりの富岡八幡宮（東京都江東区）で初披露された。伊能大図（縮尺3万6000分の1）214枚分をすべて、日本列島の形に接続すると38×34メートルの広さになるという。復元に取り組み伊能忠敬研究会（星埜田尚代表理事）は、全国巡回展示を企画している。近年、相次いで確認された伊能図をデジタルデータ化。1×2メートル大のフロアパネル上に再現し、現在約60枚が完成している。伊能の測量旅行の出発地、富岡八幡宮のある江東区では、各地域の展示会運営への参加者や、運営費用を募っている。問い合わせは、日本ウォーキング協会（03・5256・7855）。

2008. 12. 19 読売新聞 朝刊 第3社会面

2008. 12. 19 東京新聞 朝刊 社会面中央

伊能忠敬が描いた関東の地図を精密に印刷したマットの上で、話し合う人々—18日、東京都江東区の富岡八幡宮で



### 来春から原寸巡回

江戸時代に伊能忠敬（1745—1818年）が作った日本地図「伊能大図」の写しをデータ化し、人がその上を歩いて見ることができる大型マット状の地図に復元する作業が進んでいる。民間の伊能忠敬研究会などが18日、測量の出発地である東京都江東区の富岡八幡宮で発表した。来春から測量開始210年に当たる2010年を以て3年間、全国で公開する予定。

大図の原本は明治初期の火災で焼失したとされるが、模写図などが見つかり、04年までに全214枚がそろった。今回は、これらをデータ化してつなぎ合わせた原寸大（縦約50m、横約46m）の大図をウレタン製マット約270枚に描く。忠敬の子孫で洋画家の伊能洋さん（74）は「忠敬の名を知っていても、実際に地図を見たことのある人は少ないはず。一人でも多くの人に見てもらおう機会になれば」と話す。

### 伊能図を歩く

同会は展示会場を募集。制作費の一部に充てるため、5000万円を目標に募金も始める。問い合わせは、発起団体の日本ウォーキング協会＝電03（5256）7855＝へ。

伊能大図の復元図公開  
来年4月から開催予定  
の「完全復元伊能大図等

2008. 12. 19 毎日新聞 朝刊  
第3社会面

全国巡回フロア展」で公開される伊能大図の原寸大復元図の一部が18日、富岡八幡宮（東京都江東区）で報道機関に公開された。写真。国会図書館が所蔵する43枚のうち関東部分を復元し、縦4メートル横5メートルにしたもの。街道にそって神社仏閣、官場、領主宅などが細かく書き込まれ、色鮮やかな方向盤が特徴。巡回展で46枚のパネルが展示さ



れ、地図上を歩いて鑑賞できる。現在考えられる中で、伊能が徳川家に納めたものに最も近い「伊能忠敬研究会」という問い合わせは東京都文京区湯島1の2の4日本ウォーキング協会（03・5256・7855）へ。



## 「伊能ウオーク 10周年記念の集い」開催

二〇〇九年二月二日(土) 午後一時、東京・両国の江戸東京博物館に四〇数名の元伊能ウオーク隊員が集まった。一九九九年一月二十九日に江戸東京博物館を出発してから一〇年が経過したことを機会に、当時の関係者が集い、思い出話などに花を咲かせようと企画されたもの。一泊二日の日程で行われた。

当日は江戸東京博物館に午後一時に集合、新沢義博隊員が一〇年間大切に保存していた「平成の伊能忠敬 ニッポンを歩こう」の横断幕を掲げて日比谷公園までの一〇キロをウオーキングした。一〇年ぶりのウオーキングを楽しんだ後、午後四時から虎の門バストラルで記念パーティーを開催。翌日は一〇数名が東京駅に集合してバスで佐原の伊能忠敬記念館を訪問した。

本会会員でこの催しに参加したのは伊能洋・陽子夫妻をはじめ、新沢義博、大庭功、中山翠の各氏。参加者の一人、大庭功さんは、当日の様子を次のように述べている。

大庭「私はウオーク隊を先導する車の運転を担当しました。伊能ウオークの大きなシンボルマークをつけた派手なワゴン車で一車線規制が行われている大通りを注目を浴びながら進みました。沿道の声援に窓を開けて手を振って、晴れがましい気持ちでした。ウオーク隊よりも一足先に会場に着き、集団を出迎えて、満足感がありましたね。韓国の金さんが現在の勤務地ベトナムから参加されたことが印象的でした。ウオーク後のパーティーでは、『伊能ウオーク』以来初めて会う人もいて、「いやあ〜!」という感じで、にぎやかに交歓することができました。」  
また「新ちゃんトラック」で名を馳せた新沢義博さんは一〇周年の集いでもコースリーダーや司会を務め、大活躍でした。



10年ぶりのウオーク隊 横断幕を前に記念撮影

金井三喜雄氏(元朝日新聞社)撮影

# 飛驒における伊能測量が明らかに —岐阜県歴史資料館で史料保存—

大前家文書（下呂市萩原町）

## 伊能本隊の足跡を高山陣屋に報告

このほど、岐阜県歴史資料館で保存されている文書のなかに、伊能測量に関する資料が保存されていることがわかった。当資料館歴史資料部担当監・河井信幸氏から伊能家あて手紙で連絡があったもの。

河井氏によると、岐阜県歴史資料館で保存されている大前家文書（岐阜県下呂市萩原町）の史料を研究していた資料館勤務の小川敏雄氏（元岐阜県歴史資料館長）と、歴史資料部長の田添好男氏が、伊能忠敬に関わる史料を発見し、当時の忠敬の動きを明らかにした。史料は伊能忠敬に関わる内容を高山陣屋（飛驒地方を治めていた幕府の代官所）に提出した報告書の控だということである。

このような貴重な史料が岐阜県歴史資料館に保存されていることがわかったことに河井氏は忠敬ファンの一人として感動し、報告するためにお手紙をくださったとのこと。氏はこれを機に、忠敬の業績を県内に広めていきたいと考えている。

史料の発見者のうち小川氏は発見の後、この史料を使って忠敬が飛驒の測量に来たことを紹介する稿を書き、新聞に掲載された。また、田添氏は「授業に仕える史料撰」として県内の小中学校に電子メールで配信し学習に役立てる取り組みをした。手紙に添えられた各氏の著作を以下にご紹介させていただく。

歴史資料部部長田添好男氏執筆

## 「授業に使える史料撰」NO. 23 より抜粋

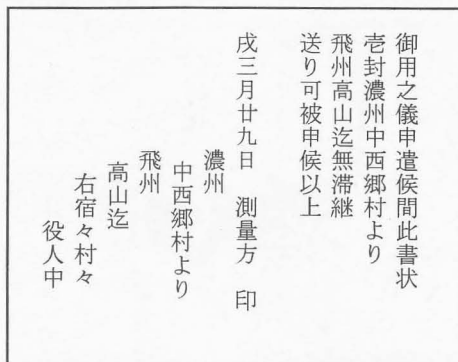
【解説】伊能忠敬は第八次測量中の文化十一年（二八一四）、美濃から飛驒にかけて県内の主な場所を測量した。今回発見された史料は、その際に伊能側から出された「先触」（史料1）、ならびに測量隊が中呂村を通過した際に村役人が記録し、高山陣屋に提出した報告書の控「中呂村書上書」（史料2）である。

【史料1】史料1には「御用（測量）のことについて言い渡すので、この書状一袋（袋の中に何通かの書状が入っている）を美濃国中西郷村（現岐阜市）から飛驒国高山（の各村や宿）まで滞りなく引き継ぎ送ること」と記されている。伊能ら測量隊一行は、向かう先の村々で測量が円滑に行われるよう、史料1のように「先触」を出し、添付の書状で宿泊場所や食事の内容・観測に適した場所などについてあらかじめ準備するように命じた。文化十一年の測量では、伊能ら十五名は、加納を出立した後二手に分かれて測量した。当初、伊能の本隊は苗木・福岡・加子母・下呂・小坂・久々野を通り、高山を経て野麦峠から信州の木曽福島へ向かい、別隊は、八幡・金山・下原から下呂・高山に入り、高山から旗峰・平湯を通り信州松本へ向かう予定であったが、別隊も高山から本隊と共に野麦峠へ向かった。測量速度は一日平均三里であったといわれるが、星の観測を伴う測量であったため、天候によって日程はたびたび変更された。



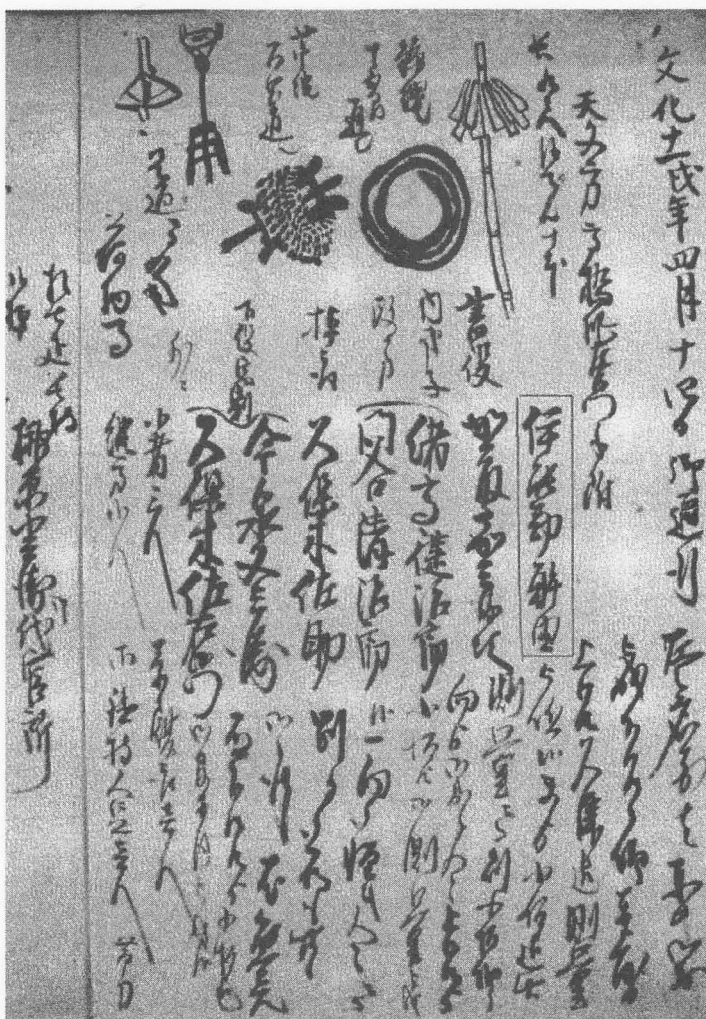


史料1：測量方飛州村々廻村一件



【史料2】史料2は測量隊が中呂村（現・下呂市萩原町）を通過した時、村役人が残した記録である。これによると、中呂村を通過したのが文化十一年四月十四日であり、測量隊員の氏名の中に伊能勘解由とあることから本隊であることがわかる。また測量隊が使用した道具として、竹竿・縄・方位盤・象限儀などがスケッチされており興味深い。伊能ら測量隊は、日本全国をくまなく歩いてまわりながら、こうした道具で距離や緯度・経度などを測定したのである。ちなみに、伊能らが測定した高山（三之町五丁目）の緯度は、36度8分30秒である。現在の2万5千分の1の地形図では36度8分36秒であるから、伊能らの測定がいかに正確であったかがわかる。

（「授業に使える史料撰」NO.23より）



史料2：「中呂村書上書」

# 悠遊 ものがたり

元岐阜県歴史資料館長  
小川敏雄

## 伊能忠敬、 飛騨に来る

伊能忠敬は、日本で初めて全国を測量し実測地図「大日本沿海輿（よ）地全図」を作製した人です。その経歴はちよつと変わつていて一七四五（延享二）年に上総国（かずさのくに）現千葉県の名主の家に生まれ、十七歳の時に下総国（しもさのくに）同の伊能家へ婿養子に入ります。家業の酒造業に励み伊能家を盛り立てますが、五十歳の

時に隠居をして家督を長男に譲り、自らは江戸に出て幕府の天文方高橋至時（よしとき）に西洋暦法を学びました。一八〇〇（寛政十二）年閏四月には、至時の依頼を受け幕府の許可を得て奥州街道から蝦夷（えぞ）地太平洋岸の測量に出かけて地図を作りしました。その精度の高さが幕府に認められ、やがては幕府の命を受けて全国測量を進めることになりました。



大前家文書（岐阜県歴史資料館蔵）に描かれた測量器具。  
右からぼでん、鯨縄、芋縄、方位盤、象限儀

一八一四（文化十）年、この忠敬が飛騨にやつて来ました。三月二十九日に伊能勘解由（かげゆ）隠居後の通称）の名前で飛騨郡代神原小兵衛の用人あてに書状を送っています。

飛州御支配所の村々を廻ります。総人数のうち手分けをして、一手は濃州苗木より福岡、加子母下呂、小坂久々野を通り、高山から野麦（寄合渡）よりあいど（長野県）を通ります。一手は濃州金山より下原、保井戸、下呂を通り、高山より旗鈴、平湯を通り、信州路に参ります。お世話になります。御支配の村々に宿について差し障りのないようにお申し付けください。日限についてはしかとは分かりませんが、高山へは四月十六日ころに着くと思ひます。なお、付き添ひの者は、永井甚左衛門、今泉又兵衛、門谷清次郎ほか内弟子等十五人です。相応の宿を仰せ付けください。また、忠敬ら本隊が通過する村々にあてた「先触」には、測量や宿泊地等の予定が記されています。加納を出立して御園町より佐兵衛新田、芥見岡、太田までは測量を行い、それより中山道を通って苗木までは測量を行わねえ。苗木から下呂、高山、野麦、寄合渡（これ以降は長野県、八無原

（やぶらは）までは測量を行い、それより測量を行わないで洗馬（せま）へ行き、松本、青柳、善光寺までは測量を行う。宿泊所では夜分に星の測量を行うから、測量器を据えるために南北見晴らしの良い場所を十坪ばかり用意してほしいこと、雨天等により逗留（とうりゅう）もあること、宿代は定めぬ通り、払うが食事はあり合わせの品一汁一菜のほかは必要ないことなども書き添えています。

四月十四日には小坂に入り、中呂村名主大前久左衛門宅で小休止をしました。久左衛門はこの時の様子を高山陣屋へ報告していますが、それによると、忠敬たちは、長さ九尺のぼでん（梵天）目印に立てた棒や十五間の鯨縄、百間の芋（からむし）縄、方位盤、象限儀（しやうげんぎ）などの測量器具を持つていたことが分かります。十六日の夜には、高山三ノ町の旅館宿屋の前に象限儀を据えて緯度と経度を測量し



伊能忠敬2隊の実際の測量経路と主な宿泊地。予定変更により文書の記載と異なる経路がある。



平成二〇年度研修報告

十一月三〇日(日)～十二月二日(火)

忠敬先生思い出の地―四国・山陽・しまなみ海道―

矢能 彰

今年の研修旅行は、見学・研修先でお世話になる方々との調整や、瀬戸内島々の回遊を、しまなみ海道最後の橋、豊島大橋開通に合わせて再企画していただくなど、鈴木純子事務局長はじめ、幹事の方々の大変なお骨折りを戴いた。

第一日目

羽田↓広島屋↓福山・神辺 箱田良助生誕地↓大山祇神社↓向上寺↓しまなみ海道↓今治国際ホテル泊



十一月三〇日(日) 快晴。富士山がすっきり見える。

旅行社の添乗員金指さんを含め一行十二名。定刻八時一五分に羽田を発つて広島空港に着いた。バスに乗り換えて「瀬戸内しまなみ海道」へ。二四人乗りの結構デラックスなバスは約一時間の高速道路を快適に進む。山中の紅葉が実にきれい。私にとっては出発から、九月の例会で見せていただいた呉・入船山記念館所蔵の『浦島測量之図』の巻物の本物に接することができると、ワクワクの旅だった。

約一時間で箱田良助の誕生の地、神辺に到着。箱田良助はこの辺で生まれた。(伊能測量隊の隊員であり榎本武揚の父でもある箱田良助については研究会会報第五四号、西川治さん「伊能塾講座第一回」六三頁に詳細報告あり。これをご参照ください。)

神辺本陣は一七四六年、忠敬が生まれた翌年に建立された。現在も

当時のままで保存されており、敷地面積は約一、〇〇〇坪という。次に廉塾ならびに菅茶山旧宅を訪れる。廉塾は一七八一年頃に菅茶山が開いた塾である。菅茶山は神辺の東本陣(酒造業)に生まれ、京都で朱子学を学び、神辺に塾を開いた。全国から学生

が集まったという。実業家でもあり、伊能忠敬と面識があつた。一九歳から三四歳の間に六回京都に行っている。菅茶山は一七四八年に生まれ一八二七年に八〇歳で没した。廉塾には三部屋二〇畳の講堂があり、その前庭に「水は方円に従う」円形と四角形の手水鉢があつた。この塾で頼山陽が一年半塾頭をしていた。所蔵していた書物は二万点。現在、全て県立博物館に収納されている。図書については『黄葉夕陽村舎に憩う―菅茶山とその世界Ⅲ』広島県立歴史博物館・平成一七年刊行がある。



「福山付近で伊能測量隊は…」バスの中で渡辺さんが足跡の説明。宿場のボランティアの方の説明で、大名は布団はおるか風呂やトイレ

までも行列に持参したとの話を聞き、神辺を後にする。

サービスエリアで食事休憩。尾道ラーメンなどお好みで昼食をとり、十三時三〇分出発。福山西インターからしまなみ海道に入る。右に尾道水道、尾道城などを望みながら、全部で一〇本の橋を渡って今治に入る。しまなみ海道は来年で開通一〇年、瀬戸大橋は開通二〇年を迎えるそうである。四国へ本州で、自動車も歩行者も通行可能なのはこの海道のみとのこと。橋から瀬戸内の島々を望む。因島には村上水軍の城跡がある由。生口島に向かうべく、次のインターで降りる。

生口島着。バスを降りて耕三寺、向上寺、平山郁夫記念館などを一時間見学。平山画伯のシルクロード連作・駱駝が右向きの絵を見る。

バスに戻ると星桠代表が両手にみかんの袋を提げて乗ってきた。一袋五〇〇円だったという。十五時発。レモンやみかんが実る山々を両側に眺め、美味しいみかんをいただきながらバスは南下した。

大三島の日本総領守大山祇神社を参拝。天照大神の兄神である。しまなみ海道の夕陽の写真を撮り、十七時過ぎ今治国際ホテルに入る。

## 第二日目

今治港↓岡村島↓御手洗↓豊島大橋↓上蒲刈島↓呉↓入船山記念館↓松山↓道後温泉泊

十二月一日(月)快晴 ホテルから海が綺麗に見える。

八時三〇分、愛媛汽船のフェリー「棟方・水江・宮浦方面行」で岡村港へ。九時四五分に御手洗着。昨夕渡った橋が、朝日に映えて見事である。数名の会員がデッキに出て撮影していた。

御手洗では、はじめに庄屋・市指定文化財「旧柴屋住宅」を訪れる。

御手洗は商業と色町で栄えた町。現在は高齢化率五〇%以上とか。この地区の自治会長今崎さん、女性ボランティアの明田さんの案内で御

手洗の街めぐりをする。八月の豊島大橋開通で訪問客が多くなった由。

江戸時代の色街を歩く。元遊郭の「若胡屋」は現・御手洗会館である。元大遊郭の建物の外観は殆どそのまま、その後地域の公民館的に利用、「おはぐろ事件」で悲しい死に方をした遊女の血痕の跡など、何とも胸がつまる一角も見る。「金子邸」は桂小五郎と西郷隆盛が東征の途上、会談をした宿とのこと。地元の十四代目の時計屋さんの「新光時計店」を見学。一四〇年以上止まっていない掛時計等、地方にこれだけの古時計収集と修復の技能を持ったご主人がおられるのに感服。旧「乙女座」を見学。この島は今は島民約三〇〇人だが一八〇〇年代には一六〇〇人の住民がおり、うち一三〇〇人は遊女であった由。海路交通の拠点であったことが偲ばれる。地域の人々が近くの山上に数百人の花魁の墓地を作ったとのこと。浄土真宗のお寺大東寺を見学。

御手洗から下蒲刈に向かう。忠敬が泊まった本陣が修復されている。昼食後、市民センター市立図書館に到着。立派な図書館・市民センターである。元入船山記念館長であった井垣図書館長のご案内で、事前にご準備いただいた「入船山測量図」を見せていただく。図書館古文書二万点の中から一九二三年に発見したもの。伊能大図と殆ど変わらないものもある由。地図に描かれた山々が館長自身が撮影された多くの山と殆ど同じであると、写真と対比させてご説明された。館長の熱い思いに全員感動した。



この後、入船山記念館の「浦島測量図」を見学したが、夢中になって聞き入り、地図にのめり込んだ。この研修は「官報入船山第七号」に印刷された「浦

島測量図」に魅せられて現物を拝見にきたのだが、和紙に描かれた現物は全く違う魅力と感服した。

伊能洋氏のご祖父・伊地知季珍海軍中将が呉鎮守府司令長官であったことから、修復された長官官舎に長官制服を寄贈されたお話などが記憶にある。

一五時二五分、呉中央棧橋発。ジェットfoilで一六時五〇分松山港着。今夕のホテル道後温泉「椿館」で旅装を解く。

夕食時、明日同行していただく愛媛県立博物館学芸員の安永純子さんの蘊蓄あるお話を聞く。地元の忠敬足跡に造詣の深いのに感銘する。

### 第三日目

道後温泉↓高浜↓中島港↓大浦・文化センター↓中島港↓道後・松山観光↓松山空港↓羽田空港

十二月一日(月)快晴 高浜八時四五分、中島海運のフェリーで大浦の中島港に向けて出発。続けて三日目も快晴。瀬戸内海は気温二〇度

近くで無風。九時に中島着。棧橋で研究会

会員であり忽那八幡宮の宮司である大

宮様のお出迎えを受ける。忽那八幡宮は

九〇〇年前に建立。大宮さんは元香取神

宮の権宮司。忠敬さんが中島に測量に來

て、丁度二〇〇年目の由。港から徒歩で

近くの中島文化センターに移動し、所蔵

の大島藩の中島地図を見せていただく。

この中島図の海岸線の一部に針穴がない

砂浜部分などに、作成経路をめぐって会

員間にも多少の議論があった。



見学後、文化センター近く

の忽那八幡宮を参拝。宮司さ

んのお宅で小休止をさせてい

ただいた。南北朝時代に懐良

親王が島に三年間在住してい

た記録がある由。境内には千

年の大楠もある。また島内に

約二〇の神社があり、宮司さ

んは三つの神社の神主さんを

掛けもちのこと。帰りには

お庭の檸檬を何人かがお土産

にいただいた。

十一時四五分、宮司さんのお

見送りをうけて中島港を出発。

十二時二五分フェリーで高山

着。小型観光バスでうどん屋

に一息つく。

十四時すぎに有名な道後温泉の建物付近で写真撮影など。再びバス

で一路松山空港へ。空港を十六時三五分発、十七時五五分定刻に羽田

着。

会員十一名の有志だけのこじんまりした研修旅行ではあったが、

銘々たくさんのお出迎えと収獲を得た二泊三日であった。

(やのう あきら・(社)日本産業訓練協会・社員研修講師)





## 伊能大図総覧の地名と景觀（九）

### 星 埜 由 尚

#### 八王子

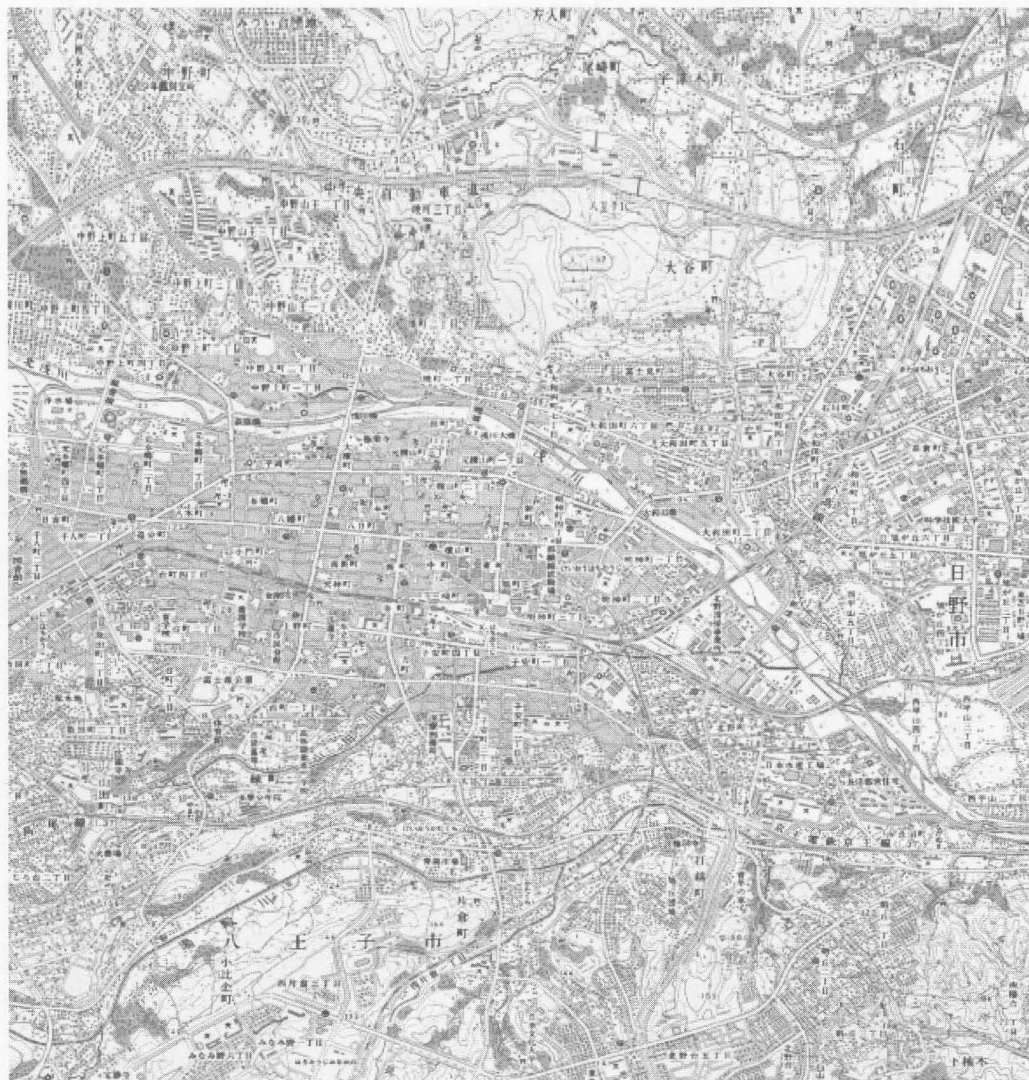
八王子は、現在人口五〇万人を超え、東京都西部の最大の都市に成長しているが、伊能測量当時も甲州街道最大の宿場であった。

甲州街道は、第七次の九州第一次測量の帰途に測量し、第九次測量で、厚木から八王子、川越に抜ける測線を測っている。八王子横山宿と記されており、八王子横山十五宿と言われ、甲州街道に沿って多数の町を連ねる宿場が形成されていた。甲州街道に沿う村は、甲州街道とは直行する方向に地名が書かれているが、八王子横山宿の地名は、甲州街道の宿場であるにもかかわらず、厚木への街道に直行する方向の文字列となっている。

八王子には、寺が多数描かれている。寺名をあげると、廣園寺（小比企村）、万福寺（小比企村）、樹珠庵（片倉村）、来光寺（片倉村）、妙楽寺（横山村）、極楽寺（横山村）、大善寺（横山村）、喜福寺（中野村）、観音寺（新横山村）である。この中で、来光寺のみが一八七八年（明治十一年）に廃寺となっているほか、すべて現存している。来光寺は、古城跡と記されている片倉城跡にあった住吉社の別当寺であったが、廃寺となって竜光寺という寺に合併された。これらの寺には、薨が描かれている。片倉城は、大江広元の子孫、長井道広という人物が室町時代に築城したと伝えられている。空堀や土墨が残り、片倉城跡公園となっている。



第1図 大図第90号 八王子付近



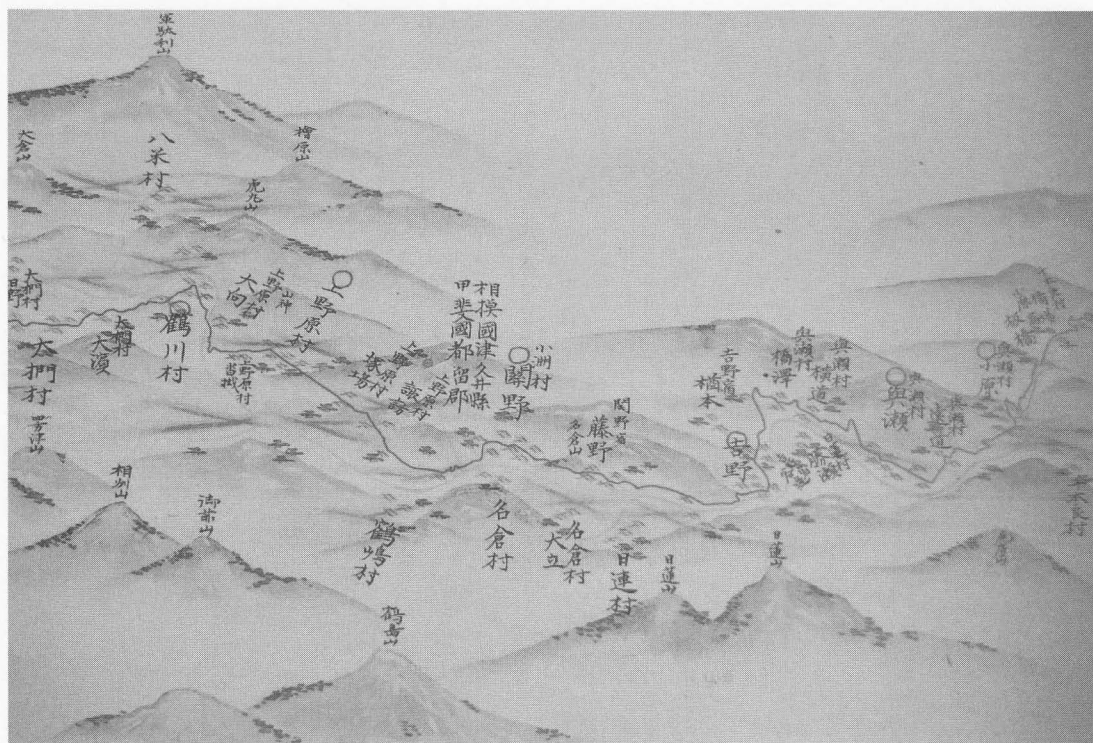
第2図 彩色地形図 八王子

## 上野原

與瀬（与瀬）、藤野、上野原といった地名は、中央線沿線で育った私にとっては、遠足や野外学習で子供の頃から慣れ親しんだ地名である。現在、相模川は、相模湖のあたりで上流は桂川、下流は相模川となるが、大図にも、河川名は記されていないが、相模川が描かれている。與瀬のあたりで川は大きく蛇行するが、日連村勝瀬と書かれ、盆地状に家並みの描かれているところが現在ダム湖の下に水没している。盆地状の地形の描き方と、河川の蛇行と相模湖の形が相似形になっている。

日連、名倉、吉野、楢本、関野、鶴島、諏訪、塚場などの村落が地名とともに茶色に彩色され、家並みが描かれている。これらの地名は現存し、河岸段丘の上に農耕地とともに集落がみられる。相模川に沿って典型的な河岸段丘が発達し、私も学生の頃地形学の巡検でしばしば訪れた誠に懐かしいところである。上野原は、なかでも広い段丘がみられ、上野原の市街地はその上に発達している。そのような河岸段丘の発達状況まで大図に正確に表現されているわけではないが、田畑を表したと考えられる茶色の彩色と筋交い様の模様が河岸段丘の発達状況を結果的に示している。伊能忠敬が地形学の知識を持っていれば、河岸段丘を上手に表現したのではないかと思う。

山名が多数記載されている。なかには同じ山名をもつ山が描かれており、それも近接している場合が多い。相州山、日連山、四方津山は、それぞれ二つずつある。なぜか不明である。



第3図 大図第98号 與瀬・上野原





第4図 彩色地形図 相模湖周辺

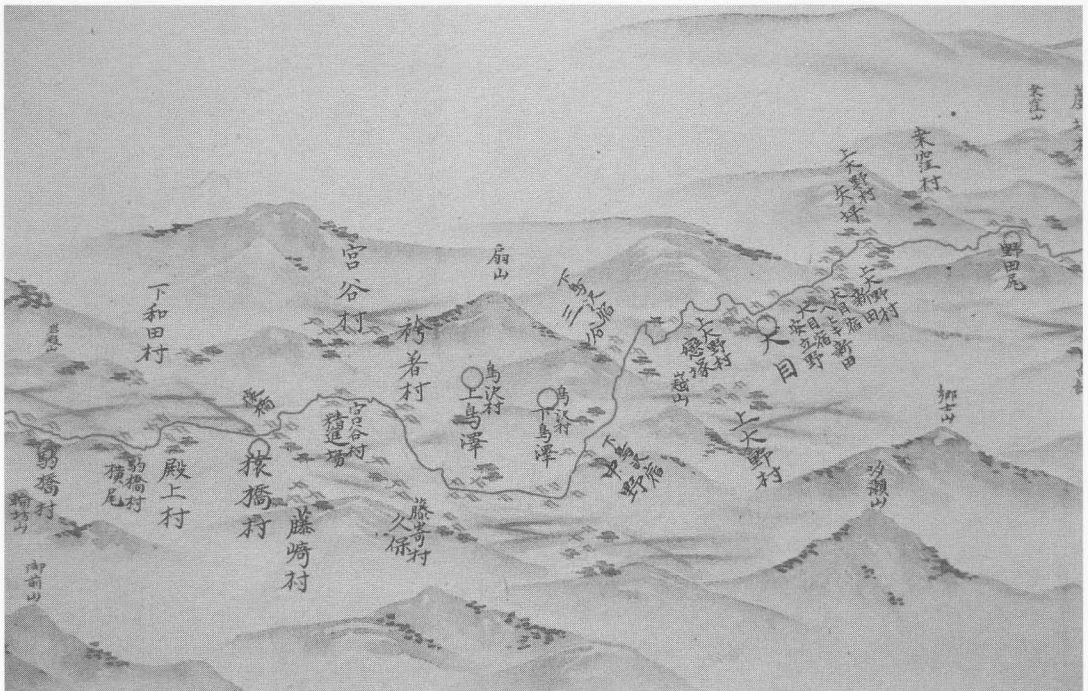
第5図は、上野原の西の部分の大図である。上野原から鳥沢まで、測線は、桂川沿いではなく桂川の北側の山に挟まれた地溝状の谷を通過している。現在中央自動車道が通過しているところに当たる。野田尻、栗窪（桑久保）、矢坪、新田、安立野（安達野）、犬目、戀塚（恋塚）、中野、鳥澤と現存する地名が測線に沿って記入されている。地形図を見る限り、測線即ち甲州街道は、桂川の高位の河岸段丘の上を山麓に沿って通っていたことが大図と地形図を照合することによって知られる。下鳥澤宿三谷と出ているのは、地形図では山谷と記された集落に当たるものと考えられる。山谷は「やまだに」読むようなので、あるいは「三谷」は、「山谷」の写し間違いかもしれない。

測量日記には、文化八年五月二日の項に「大月より駒場制札迄十六町四十八間、字横尾、殿上村、猿橋駅、又村。猿橋あり。長十七間、奇功。」とあり、大図にも桂川を測線が渡るところが描かれ、猿橋と注記がある。

御前山、岩殿山、扇山などの山名が記載されている。岩殿山、扇山は、地形図にも記載されており、このあたりでは顕著な山である。御前山は、地形図の該当する位置にはみられないが、地形図には周辺に多数の御前山の注記が見られる。

## 大月

大月と笹子峠を挟み甲州盆地の間の測線である。大月では、甲州街道の測線と河口湖方面の測線が分岐する。甲州街道は、第七次測量の帰路甲府から大月に向かって測量しているが、第八次測量では、往路に大山街道から御殿場を通り河口湖を通過して大月に設置した甲州街道の分岐点の杭（大）に繋いでいる。この杭に繋いだあと、甲府に向か



第5図 大図第97号 鳥澤・猿橋

い、富士川を南下している。

第七次測量では、笹子峠を越え、黒野田村追分で笹子川を渡った。幅一〇間(約一八m)と測量日記には書いてあり、大図にも桂川の最上流部で測線が川を横切っている。阿弥陀海道と称する宿場が描かれている。阿弥陀海道は、かつて阿弥陀堂があり、谷地形を「垣戸<sup>がいと</sup>」と呼ぶことに由来するとの説が大月市ホームページに解説されている。現在は、阿弥陀海と呼ばれている。笹子峠から大月までには、黒野田、阿弥陀海道、白野、中初狩、下初狩、上花咲、下花咲と宿場が続く。測量日記によると初狩は往古は初雁といわれ、聖護院大僧正道興<sup>せいご</sup>の「今はとて霞を分けてかえるさにおぼかなしや初雁の里」と刻める碑があると記されている。文明九年(一四七七)のことである。

## 勝沼

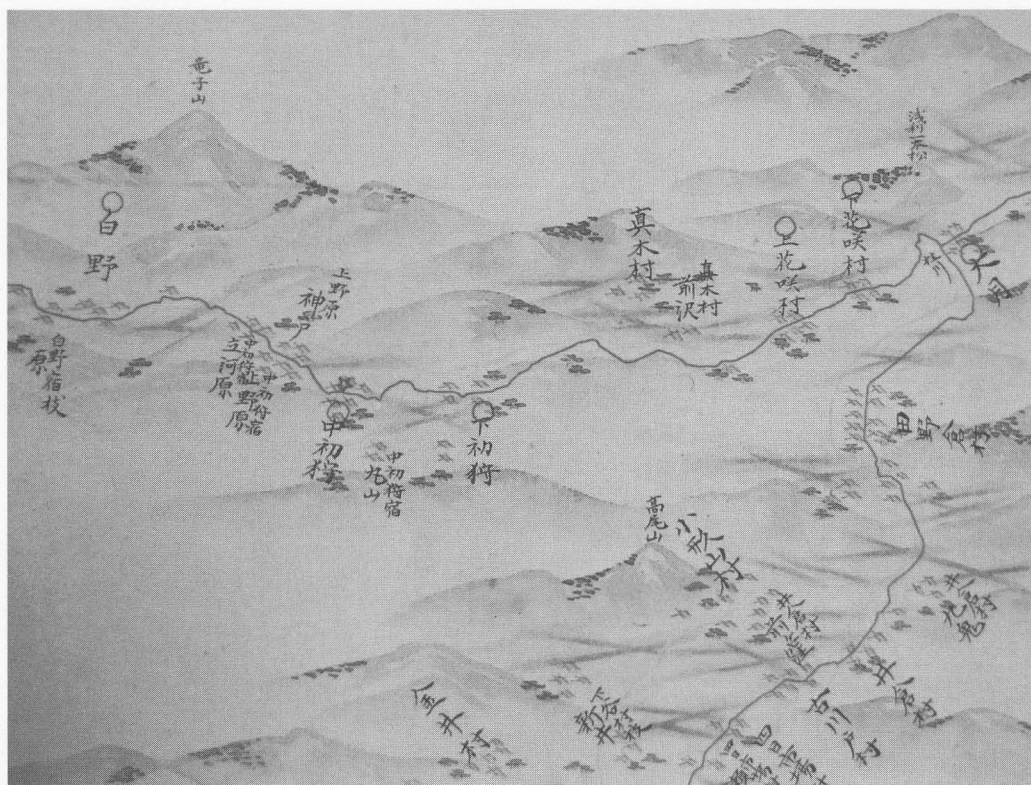
勝沼は、ブドウの産地として有名である。伊能測量当時はもちろんブドウの生産が行われていたわけではないが、勝沼の周辺は、広く茶色の筋交い模様と彩色が見られ、田畑が甲府盆地の扇状地を広く覆っていたのであろう。甲州街道を行く測線に沿って川が描かれている。これは、笛吹川の支流日川である。

勝沼の周辺の甲州街道に沿う村は、御料所、田安殿領分となっている村が多い。御料所は、測量日記には石和支配と記述され、石和に代官所があったものと思われる。測量日記には、「矢橋松治郎御代官所即御役所石和街道より三町斗<sup>さんちうと</sup>」とある。



第6図 彩色地形図 鳥沢付近





第7図 大図 97号 大月・笹子峠

石和から富士吉田に向かう測線が分かれるが、測量日記には、富士追分と書いている。文化九年（一八一二）四月三十日、この富士追分から始めて勝沼まで甲州街道を測量している。すぐ遠妙寺を通過し、川中島村で一宮に向かう測線の分岐点に杭を打ち、一宮に向かう組と勝沼に向かう組に分けて測量した。勝沼に向かつて、南田中村で日川を渡っているが、測量日記には二七間と書かれている。約五〇mの川幅である。栗原宿では大宮社御朱印七石二斗、上栗原村では諏訪社御朱印二石、勝沼村雀宮御朱印四石六升四合とあり、それぞれ大図には社名の記載はないが、薨がいくつか描かれており、これらの神社を示しているものと思われる。

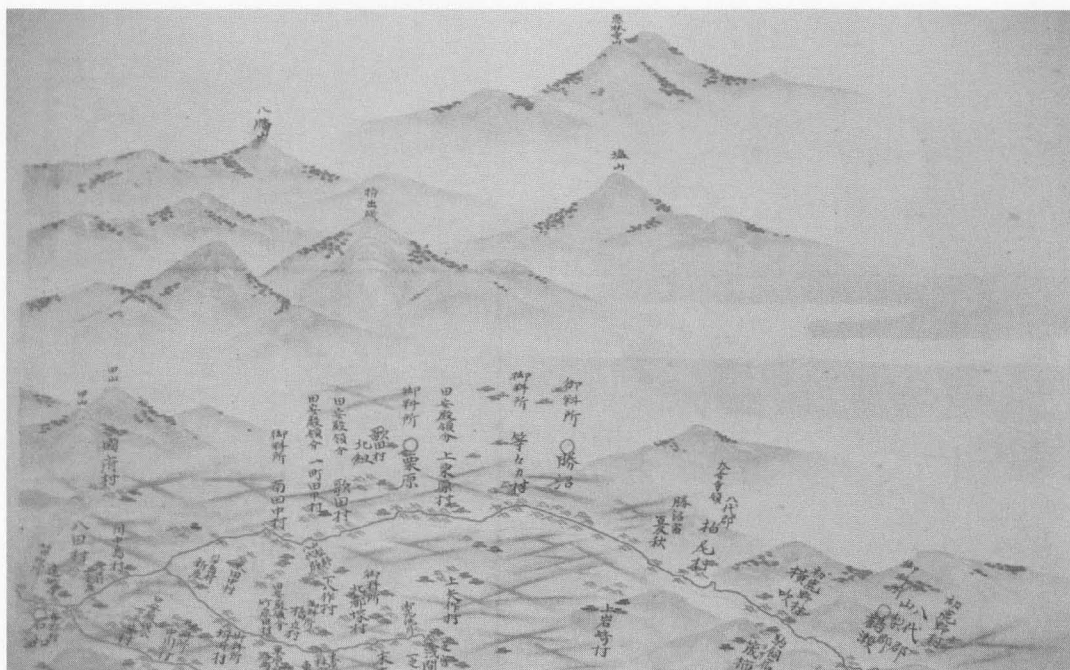
一宮の神前まで分岐した測線が達している。測量日記には、「一宮浅間大明神祭神木花咲耶姫命御朱印二三四石二斗余」と記されている。大図には、単に浅間社と書かれているのみで、村名は一之宮村となっている。御先洗川と書かれた細流が描かれているが、御手洗川の誤りである。

翌日五月一日、勝沼から初狩まで測っている。勝沼からすぐ先の柏尾には大善寺という寺があり、御朱印三十二石と日記に記されている。柏尾村は、大善寺領となっているが、大善寺の名称は、大図の中には書かれていない。大善寺は、その本堂が国宝の指定を受けている。鶴瀬宿には御関所ありと測量日記には記されているが、大図にはそのような記載はない。

大図には、恵林寺山、塩山、八幡山、指出磯、甲山といった山が描かれているが、塩山市街の背後に塩ノ山という小山があり、塩山はそれに当たるのではないかと考えられるが、その他の山名は、現在の山名に比定できない。



第8図 笹子峠



第9図 大図第98号 勝沼

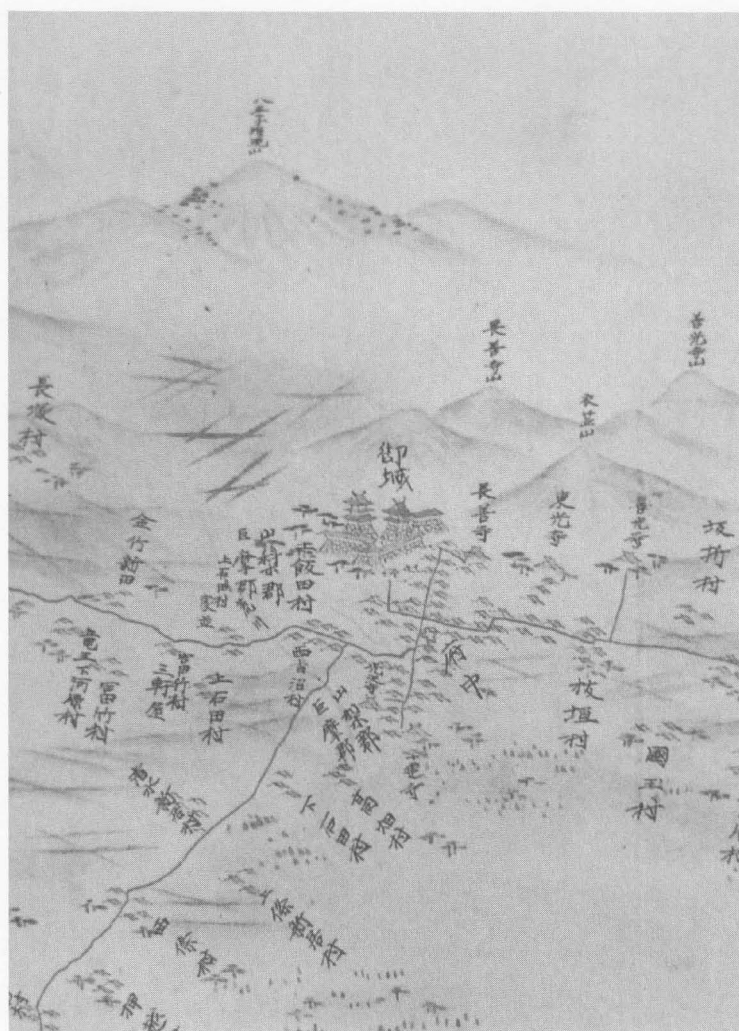
# 甲府

第10図は、甲府の拡大図である。城郭が描かれ、御城と注記が振られている。城までの測線、長善寺に向かう測線、光沢寺に向かう測線、善光寺に向かう測線がそれぞれ分岐している。

甲府は、幕府領で甲府勤番の支配するところであった。甲府勤番支配は、追手と山手の二人制で高禄の旗本がその役に就いた。公儀の城であるから御城と書かれている。

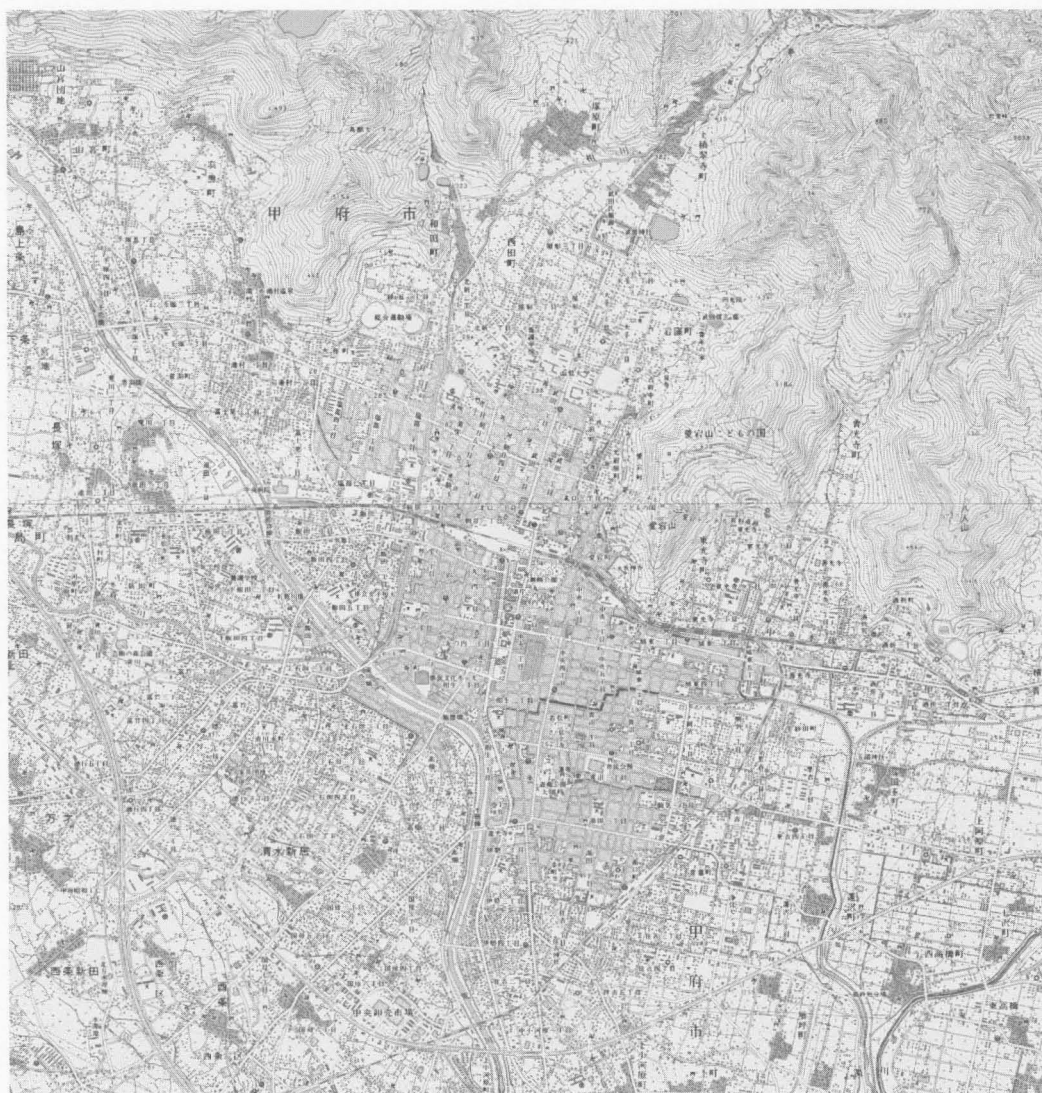
文化九年（一八一二）四月二八日に甲府の市中を測量している。測量日記によるとその日の行動は、以下の通りである。まず上飯田村の入口から測量を開始し、西青沼町（大図では西青沼村）で身延道との交点に（青）の杭を打つ。東に進み、柳町（大図には不載）にて（柳）の杭を打ち、一連寺まで測る。光沢寺の分岐には、（一）の杭を残して光沢寺まで測る。市中に戻り、柳町十字路に（十）の杭を残し、本陣、御城大手まで測り、瑞雲山長禅寺門前まで測る。長禅寺は、大図には長善寺と書かれている。酒折村（大図には坂折村）まで測るが、途中板垣村で（善）印を残す。大図を見ると善光寺まで分岐する測線が描かれており、この分岐点に（善）印を残したものと考えられるが、日記にはそれについての記載がない。そのほか、東光寺、能成寺についての記載があり、大図には、東光寺は描かれているが、能成寺については記載がない。長禅寺、東

光寺、能成寺ともに甲府五山<sup>ごさん</sup>に数えられる古刹である。一連寺は、測量日記によると御朱印一八〇石、境内七町四方とあり、現在の言い方でいえば六〇haにもなる大変広い境内であった。光沢寺は、御朱印二十石と記されている。（柳）印から板橋三間と測量日記には記述されているが、大図を見ると細い川が描いてあり、これを渡る橋が幅三間の板橋であったのであろう。



第10図 大図第98号 甲府





第11図 彩色地形図 甲府

## 身延

身延山には、第七次と第八次の測量において訪れている。第七次では、鰍沢から舟に乗り富士川を下って波木井村に着き、無測にて身延山まで直行している。日記には、諸堂本房一覽とあり、境内を拝観した後、奥院へ登山し測ると記されている。しかし、大図には奥院までの測線は描かれていない。

身延には代官所があり、中村八太夫という代官の名前が日記には載



第12図 大図第100号 身延付近

っている。文化九年（一八一二）四月二六日の項を見ると、「早川河原十町水二十四間飯富村」<sup>※</sup>と書いてあり、大図を見ると、富士川の支流早川が合流する地点が飯富村に当たり、富士川と早川の河原は黄色く彩色され、その幅も非常に広い。約1kmの河原と四〇m以上の川幅の早川を渡ったのであろう。また、鰍沢の近くの羽鹿島村で富士川を渡っているが五十四間としており、川幅約一〇〇mあったことが知ら

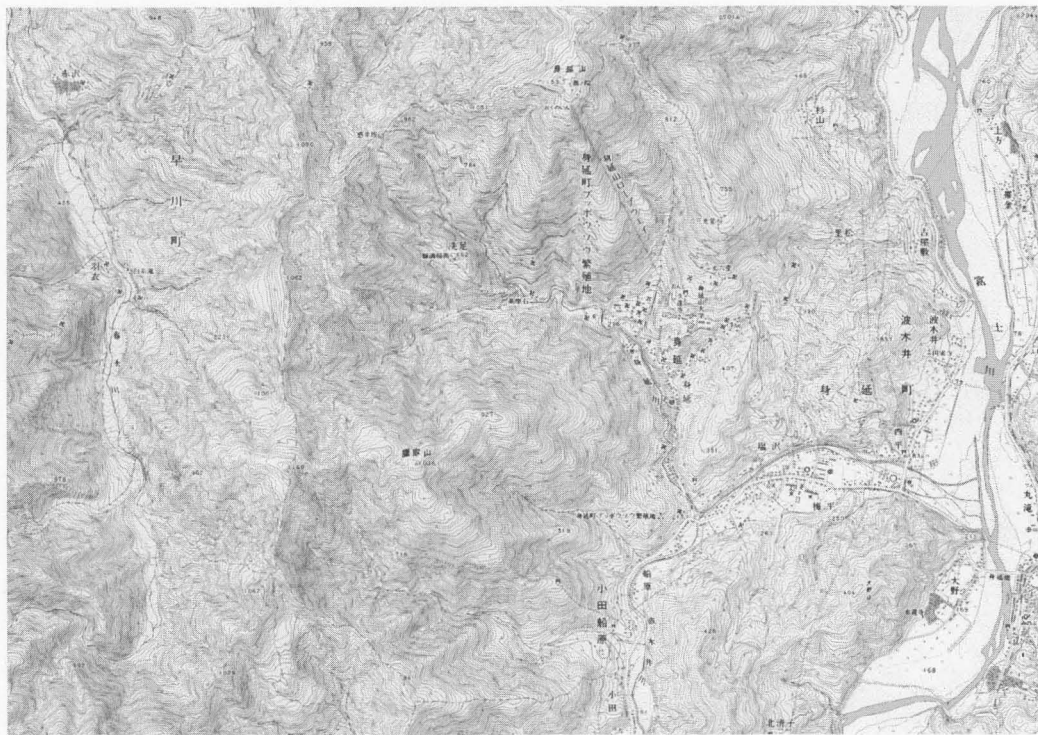
れる。第八次においては、市川大門から舟に乗り、第

七次の時と同じく波木井村で下船している。身延山の大林房に止宿し、天測を行っている。

身延山門前から始め、横根村まで測っている。身延から横根村までは富士川を離れ山中の谷を通っているため、この間は富士川が描かれていない。身延町の門前町も家並みが測線に沿って描かれ、山中の門前町の風情が表されている。

掲載した伊能大図は、すべて、国立国会図書館所蔵のものである。「伊能大図総覧」から転載した。彩色地形図は、（財）日本地図センターホームページから転載した。

（ほしの よしひさ・代表理事・（社）日本測量協会副会長）



第13図 彩色地形図 身延周辺

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」から引用した。

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」

\*道興（永享二年（一四三〇）第12図 彩色地形図 身延周辺

年）・大永七年（一五二七年）は、関白近衛房嗣（在職一四四五年、一四四七年）の子で聖護院門跡となった。東国を巡って書いた紀行文『廻国雑記』が有名である。

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」から引用した。

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」

\*道興（永享二年（一四三〇）第12図 彩色地形図 身延周辺

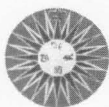
\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第二次測量篇の二」から引用

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第二次測量篇の二」から引用

\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」による。

\*武田信玄は、長禪寺・東光寺・能成寺・円光院・法泉寺を甲府五山と定めたと言われている。

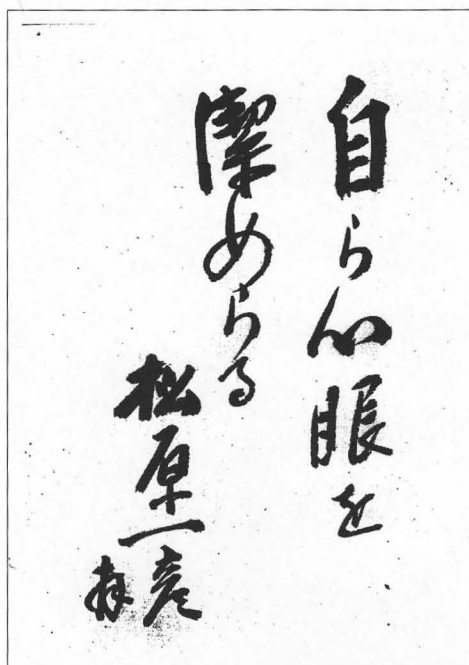
\*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の二」から引用



芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

伊能陽子



自ら心眼を  
潔めらる

松原一彦  
拝

松原 一彦

まつばら かずひこ(？ ？)

昭和二五年の参議院議員選挙において(元衆議院議員)無所属で当選。第三次吉田内閣の時である。自由党の愛知揆一・泉山三六、日本社会党の江田三郎・加藤シズエなど私の記憶にある人々と同時期。正確な生没年月日は不明。大分県湯布院関係の記事に「町出身の松原一彦先生が子供の頃(明治中期頃)云々」と、また、昭和五年の総選挙での選挙違反事件に際し、「日本青年館理事松原一彦が選挙粛正運動を起こすことを提案云々」とある。

揮毫年月日もないが、五三号の福士、緒方両氏の隣頁なので同年(大正十五年)と推察する。

(フリー百科事典『ウィキペディア』)



# 遺徳千載

昭和庚午と年五  
月四

横田秀雄

遺徳千  
載

昭和庚午之年五  
月四日

横田秀雄  
花押

横田 秀雄

よこた ひでお (一八六二—一九三八)

長野市松代の真田藩士の家に生まれる。明治六年、十二年小学校が開校となり、第一期生となった。明治二十一年帝国大学法科を卒業、判事になる。大正十五年、大審院長に任ぜられる。帝国学士院会員、明治大学総長。象山神社成立に功績。民法学の権威。雅号は鵠山。なお、子息横田正俊は第四代最高裁判所長官になり、二代続いて裁判所の最高の地位に就いている。

(長野市教育委員会文化課)

(フリー百科事典『ウィキペディア』)

※国指定重要文化財「旧横田家住宅」は江戸時代末期の松代藩の中級武士の住宅の特徴を良く残している。この家で育った横田秀雄のほか秀雄の弟謙次郎は、鉄道大臣になり、姉の和田英は「富岡日記」の著者として有名である。住宅は見学できる。車は長野インターから、新幹線長野駅からバスで。  
\*松代文化施設等管理事務所 026・278・2801

(いのう ようこ・伊能忠敬研究会顧問)

# 伊能忠敬測量隊の銚子の止宿は醤油醸造家

佐久間 達夫

伊能測量隊の全国測量の日数は、三千七百五十四日を数え、海岸線が集落から離れていた所では、仮屋や会所などに宿泊したが、それ以外は庄屋や寺院に宿泊し、隊員が多い場合は、組頭・百姓・問屋などにも止宿した。したがって、測量隊が宿泊した本陣と脇本陣とを合わせる、その数は相当数になる。

第二次の伊豆以北太平洋岸測量で、房総半島の最後の測量地であった銚子では、飯沼村（現銚子市飯沼）で醤油醸造を営んでいた田中吉之丞家に、享和元年（一八〇一）七月十八日から二十六日までの九日間逗留し、測量などにあたった。

## 資料一

伊能忠敬の測量日記 佐久間達夫校訂

（享和元年）

原本 伊能忠敬記念館所蔵

・七月十八日 晴天。朝六ツ半前井戸野村（現千葉県旭市井戸野）出立。中谷里村、是より海上郡、それより仁玉村、十日市場村、足河村、椎名内村、西足洗村、野中村、東足洗村、三川村、横根村、萩園村、行内村、平松村、飯岡村、下永井村、上永井村、小浜村、辺田村を経て銚子港、飯沼村東町着。止宿田中吉之丞。此夜雲間に少し測る。

・七月十九日 朝晴。高神村、犬若岬より測量初め、飯沼村の内、黒生という所にて止、此日、午後白雨あり、七ツ半頃帰着。

・七月二十日 朝晴、無程曇。予は病気に付き、郡蔵、宗平、秀蔵、慶助を遣わして、黒生より飯沼村の内、和田、伊貝根迄を測りしむ。午後より大雨にて止。夜も又大雨。一昨十八日着の日、佐原伊能三郎右衛門、同平右衛門、繁蔵、並に清宮亀太郎、津宮久保木太郎右衛門、遠路見舞に來たる。伊能七左衛門を同道にて見舞いに來たる。

・七月二十一日 朝より大雨。

・七月二十二日 雨。

・七月二十三日 曇天。四ツ後、東町河岸より新生村、荒野村、今宮村川岸、常陸鹿島郡東下村波崎（常陸原という）へ渡り、方位、間数を測る。

・七月二十四日 朝より晴る。然れども海面濛気おおく遠測ならず。午中、太陽を測る。津宮久保木太郎右衛門、武州、相州、豆州、両総州、房州の海辺地図の下書を頼置。佐原より見舞のものもだんだん帰る。

・七月二十五日 晴天、暁七ツ頃より今朝六ツ後迄雨。それより晴天。午中、太陽を測る。午後、筑波山、日光山等を測る。

・七月二十六日 晴天、此早朝、日の出に犬若岬において、慶助、富士山を測る。着後、十九日より富士山の方位を測らんと日々手分けし、高きに昇り、遠くへ出しけれど、日々濛気おおくして見えざりき。此朝、富士山の測得たり。そのよろこび知るべし。予が病氣も最早全快に及べり。此日、奥州小名浜迄先触出す。

・七月二十七日 朝より晴。山海ともに濛気おおし。六ツ半後、銚子港飯沼村出立。利根川を越えて常陸国鹿島郡東下村の内、波崎に到る（以下略）。

伊能測量隊が宿泊した「田中吉之丞家」は、江戸時代末期の銚子の



明治十年頃のヒゲタ醤油の工場 同社HPより

経済を牛耳っていた「田中玄蕃家」の分家である。田中玄蕃家は「ヒゲタ醤油」の醸造元として、早くから巨富を得。その名は諸国に知れ渡っていた。

宝暦三年八月十七日付の「銚子醤油仲内穀仕込高数」によると、

田中玄蕃 二十一本。此石、しめて三百七石五斗。

田中吉之丞 十三本。此石、しめて百九十八石五斗

と、記してある。

当時の銚子の人々の間では、「銚子で『サマ』のつくのは、観音様と玄蕃様」である、と、口づさんでいた(『銚子市史』)。

田中吉之丞家は、玄蕃家の五世繁貞が隠居して一家を創ったのが始まりである。(「田中玄蕃氏の系譜」)

資料二

田中玄蕃氏の系譜

田中 真子識  
田中 栄一所蔵。

一世 玄蕃 — 二世 玄蕃 — 三世 玄蕃 —

弘治二年没 永禄四年没 延宝五年没

四世 玄蕃 — 五世 玄蕃繁貞

寛文九年没 享保十二年没

(隠居して吉之丞家を創る)

初代 郡良 — 二代 良貞 — 三代 重光 —

宝暦十二年没 寛政十二年没 天保三年没

四代 憲吉 — 五代 清寧 —

嘉永三年没 嘉永二年没

六代 憲久 — 十代 栄一

慶応二年没

田中吉之丞家の家屋敷は、現在の銚子市東町の県道外川港線より南側一帯にあり、宅地二千八百坪、工場敷地二千坪という広大な土地を所有していた。伊能忠敬が宿泊したときの当主は、田中家の家譜から推測すると、三代重光の時で、測量隊は、ここで九日間逗留して、利根川の河口付近の測量や、筑波山、日光山、久慈山、富士山などの方位の測定、久保木清淵に地図の下書きの依頼、来客との面談などをして

資料三 犬若岬よりの富士山の方位（山島方位記）

伊能忠敬記念館所蔵

申 十九分二十五秒 中方位盤使用  
申 十九分二十秒 甲方位盤使用  
申 十九分〇秒 甲方位盤使用

田中玄蕃・吉之丞両家が、銚子を代表する醤油醸造元であったように、佐原の伊能忠敬家も、一時期、永沢治郎右衛門家とともに、佐原での酒造高を競っていた。

「測量日記」にも、全国の次のような醸造家が記されている。

資料四 測量日記に記述されている醸造家

佐久間達夫校訂。

● 第五次測量日記 文化二年

・三月二五日 三ヶ日村（現静岡県浜松市）  
小池八左衛門、酒造をなす。

・十月六日 大石村（現兵庫県神戸市）  
造酒家多く、繁昌と見える所なり。

● 第七次測量日記 文化六年

・十月二七日 鏡村（現滋賀県竜王町）  
止宿林三郎兵衛、造酒屋。

・十一月九日 西宮町（現兵庫県西宮市）  
西宮、酒造四十四軒。銘酒「白菊」小西善五郎造酒。

・十一月十日 住吉村（現兵庫県神戸市）  
酒造屋 吉田喜平治。

大石村（現兵庫県神戸市）

造酒屋 三十軒ばかり。

・十二月一八日 台道村（現山口県防府市）  
止宿 上田庄蔵 造酒屋。

○ 文化七年

・二月六日 下原村（現大分県国東市）  
福力屋儀兵衛 造酒家。

・二月十二日 府内（大分県大分市）  
橋本屋八左衛門 造酒家 七八百石醸造。

● 第八次測量日記 文化九年

・二月七日 盛徳村（現福岡県広川町）  
中食 造酒家 喜多屋文蔵。

・八月九日 今宿駅（現福岡県福岡市）  
止宿 酒造屋長三。

・十月二日 惠蘇宿（現福岡県朝倉市）  
止宿 酒造屋 武作。

なお、忠敬は、「測量日記」に、止宿の家屋敷の感想を齒に衣を着せないで、

・家作、諸器ともによし、  
・家作もよく、間数も多し。  
・家作、庭園広し。景色よし。  
・家作古く、小家にて悪し。  
・甚だ小家、漸く泊す。などと記述している。

次に測量隊の食事の献立であるが、伊能忠敬の出した「先触」では、「食事は、其所有合之品々に而、一汁一菜の外馳走がましき儀、決而



被致間数候」と、記されている。一汁一菜とは、一種類の汁物と、一品のおかずの意であるので、転じて粗末な食事という意味にも解釈できる。

「測量寛」などによると、諸藩では先に宿泊した村々の様子を聞き合わせ、前の村以上の準備をし、一汁一菜どころか、一汁五菜くらいは普通であった。

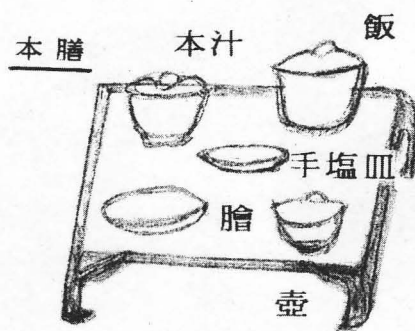
江戸時代の「本膳料理」は、汁と菜の数によって一汁三菜、二汁五菜などの種類があり、汁と菜の数が多くなると、膳の数も増し、本膳、二の膳、三の膳、与（四）の膳、五の膳といった。

○ 本膳料理（一汁五菜）

- ・ 飯（めし）
  - ・ 汁（しる）
  - ・ 手塩皿（てしおさら）
  - ・ 壺（つぼ）
  - ・ 膾（なます）
  - ・ 平皿（ひらさら）
  - ・ 猪口（ちよく）
- 本汁は味噌仕立て。  
香の物などを盛り付ける。  
野菜の料理などを盛る。  
魚肉などを酢等であえた物を盛る。  
焼魚などを盛る。  
和ものなどを盛る。

旅先での測量隊の受け入れ態勢は、初期の段階では、伊能忠敬自身の申し入れによって実現した事業であったので、隊員にとって満足のいくものではなかった。幕府の公式事業になってからは、測量隊の送迎、宿泊、食事、測量手伝いなどに遺漏のないように配慮したようである。しかし、そのために諸藩の測量付回役や村役人にとっては、経済的、精神的な苦勞があった。全国測量は、日本人総出員の事業であったといっても過言でなからう。

本膳料理



向付



〔図説江戸料理事典〕 柏書房

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

# 研究レポート『伊能忠敬』（五）

## 富岡八幡宮から川崎まで歩く！（その一）

石谷 春香

### 第七章 富岡八幡宮から川崎まで歩く！

#### 一 一八〇一年五月四日 伊能忠敬の旅

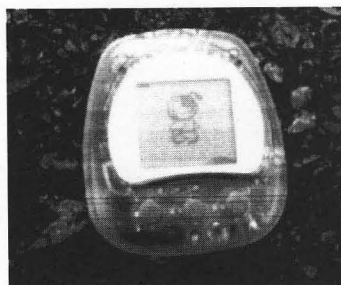
伊能忠敬の第二次測量の第一日目のところを、もう一度見てみます。

一八〇四年（享和元年）四月二日（いまの五月一四日）朝よりくもり。五ツごろ（いまの八時ごろ）平山郡蔵、平山宗平、伊能秀蔵、尾形慶助、嘉助の六人で富岡八幡宮に参拝して出発。伊能家の関係者の人は品川まで見送り。「村田」という料理茶屋で昼食して別れる。

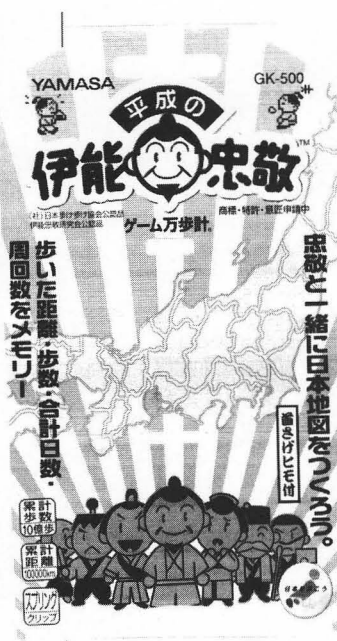
午前より小雨。八ツごろ（いまの二時ごろ）より中雨。七ツごろ（いまの四時ごろ）に川崎宿に到着。郡蔵、秀蔵、慶助は手分けして大森、羽田の海沿いを測量し、夕方、川崎で合流。川崎宿（いまの川崎市川崎区川崎）新田屋平三郎宅に宿泊。

忠敬は自宅↓富岡八幡宮↓品川↓川崎と歩いていきます。私も歩いてみます！忠敬が歩いたのは一八〇一年五月なので、私は二〇六年後の同じところを歩くことになります。そしてその時の忠敬は五六歳、私は一二歳※なので、四四歳も私のほうが若いです。しかし地図で見るととても遠そうです。（※編集部注 二〇〇七年五月当時）

「伊能図江戸府内図（南部図）と2000年の東京」という本があります。大きな江戸府内図（南部図）が入っています。そして、現代の透明な地図もあり、かさねて見ることができます。比べて見るとやはり埋めたてのところがだいぶ違っています。大きな道は昔と同じです。



「平成の伊能忠敬」というゲームがあります。これは万歩計で、歩いた歩数で日本を歩くゲームです。この万歩計をもって歩いてみます。

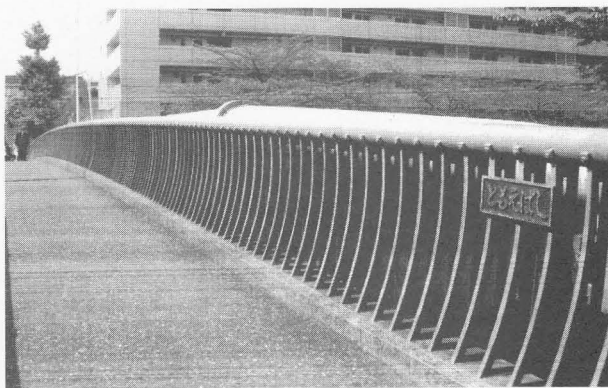


二 二〇〇七年五月四日 私の旅

二〇〇七年五月四日、晴れ。七時二五分、家を出発。万歩計の「平成の伊能忠敬」は持っています。大江戸線の「門前仲町駅」で降りて、富岡八幡宮に九時に到着。富岡八幡宮には以前に來ています。伊能忠敬の像もありました



それでは、川崎を目指して出発します！とてもいい天気です。「巴橋」ともえを渡り、「関口橋」を渡ります。



巴橋



関口橋

「調練橋」を右に曲がります。小さなかわいい猫がいます。地震が来たら倒れそうな家もあります。少し行くと大きな通りに出ます。清きよ澄すみ通りです。左に曲がります。

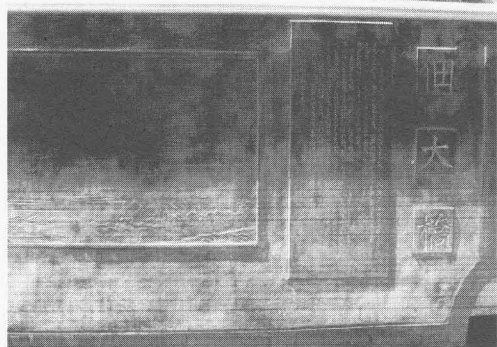
大きな橋の「相生橋」を渡ります。



少し行くと「明治丸」があります。東京海洋大学の中にあり、以前は練習船でした。国の重要文化財となっています。

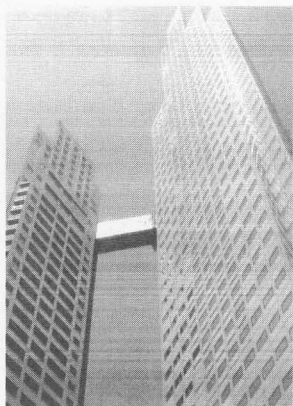


橋からの眺めはともいいます。橋を渡ったところでちょっと休憩です。コンビニでアイスを買って相生橋横の公園で休みます。とても景色がいいです。かつこいいい船も通ります。少し休んでまた出発です。右に曲がって佃大通りに入ります。



このあたりは佃島といって昔からの下町の様子が残っています。それから高層マンションなど新しい町の「リバーシティ21」もあります。赤い橋の「佃小橋」はとても絵になるところです。橋を渡って左に行きます。高層マンションが立ち並んでいるのがすごいです。次に佃大橋です。橋を上がる階段で一休みです。





聖路加タワーに入ります。外がとても暑いので、中は涼しいと思ったのですが、逆に中の方が暑いです。



隅田川に架かる橋で、とても眺めがいいです。聖路加タワーも大きく見えます。  
長い橋を渡り左に曲がります。川沿いのきれいな道で、花がとてもきれいです。



少し行くと築地本願寺があります。古代中インド様式を取り入れた建物のお寺です。中に入ると人がたくさんいます。外では記念写真を撮っている人がたくさんいました。

中にあるコンビニでお茶を買い、ベンチで少し休みました。外に出て、あかつき公園に行きます。公園の中にはシーボルトの胸像があります。シーボルトは江戸蘭学発展のために貢献し、このあたりが江戸蘭学発祥の地でした。またシーボルトの娘いねが、築地に産院を開業したこともあり、ここにシーボルトの胸像が建てられました。公園では、初めて自転車に乗る女の子がいました。お父さんとお母さんが応援しています。それから公園には噴水があります。噴水は水の高さが高くなったり低くなったりします。小さな男の子が噴水の低い時に来て触っていたら、いきなり高くなって服がぬれていました。



晴海通りと新大橋通りの交差点から、急に人が多くなってきました。ここには「中央卸売市場」があります。新鮮な魚や野菜、果物が取り引きされています。そして通りに面して「築地場外市場」があります。食料品店など小さなお店がたくさんあります。

ものすごい人です。歩くのも、ちよとずつです。ベビーカーの人は大変そうです。お店では、生きたカニなどがたくさん売っています。それからおすし屋さんには長い行列ができています。

通りの反対には、「国立がんセンター」があります。前に来たことがあります。



そしてなんとか人がたくさんのところを抜けました。市場には右の写真のような乗り物がたくさん走っています。中はあんまりきれいではないようです。

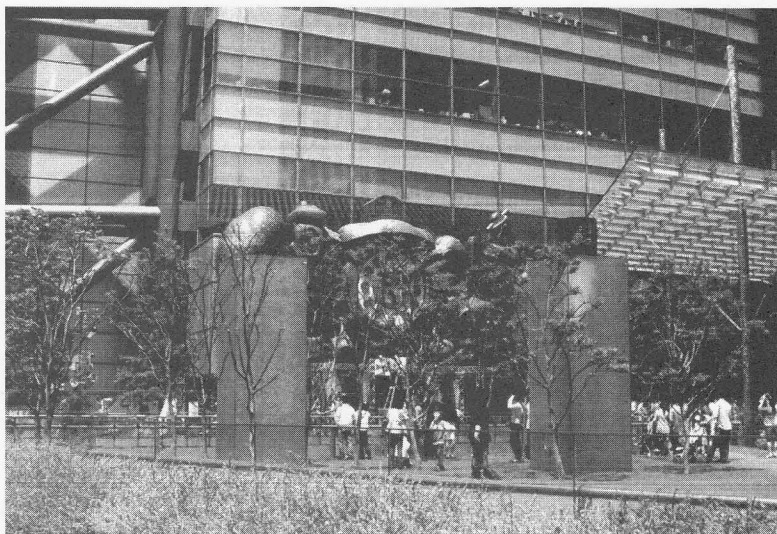
右に行き、少し行くと「浜離宮庭園」です。ここは江戸時代の大名庭園です。

した。

「ウェンディーズ」でチキンバーガーを食べました。しばらく休みま

お腹が空いてきたので、お昼にします。

なんだか人がたくさんいます。新幹線の下を通って行きます。「第一  
京浜」となります。ビルのところをずっと行きます。



少し行くとビル  
ばかりになりま  
す。このあたりは  
「汐留」です。日  
本テレビなど、た  
くさんの高層ビル  
が立ち並んでいま  
す。日テレの時計  
があります。



歩いてみると、  
「川崎まで 14 キ  
ロ」の標識があり  
ました。

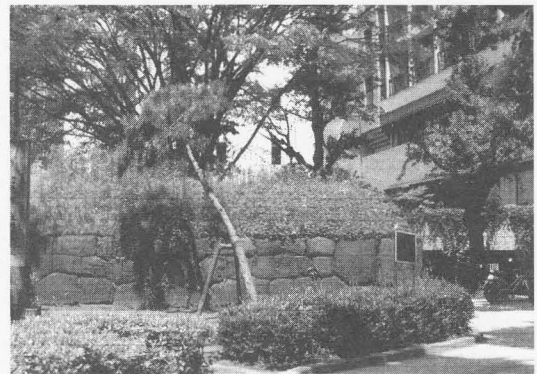
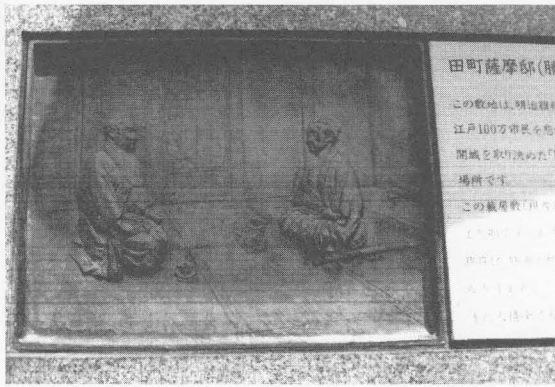
一二時、再びスタートです。まっすぐに進みます。真っ黒いホーム  
レスが歩いていました。「金杉橋」を通ります。

			
日本ウェンディーズ 浜松町店			
東京都港区浜松町 1-27-12			
秀和浜松町交差点ビル			
(代) 0120-029-370			
お食事バーガー!!			
ウェンディーズは お肉			
焼きたて 作りたて!!			
店NO-003057	レジ NO. 0003		
2007年05月04日 (金)	11時31分	1名	
E/I			
チキン	1	¥220	
ビッグハン	1	¥400	
#Mライオン	1	¥280	
#Mワイルド	1	¥380	
STMアイスティ	1	¥0	
STMメロン	1	¥0	
内税品計		¥1,280	
(消費税等 [ 5.00%])		¥60	
合計		¥1,280	
お預り		¥2,080	
お釣り		¥800	
お客様No. 0394429			

オオムラサキツツジがきれいです。少し行くと「西郷・勝会見之地」の碑があります。一八六八年（慶応四年）三月一日、江戸城総攻撃の直前に両者の談判が行われ、江戸城の無血開城が実現しました。



警察署の前を通り横断歩道を上ると、東京タワーが見えました。



少し行くと大きなパシフィック東京のホテルがあり、品川駅に到着です。暑いです・・・  
駅前のウイングでトイレ休憩。マックに入ろうとしたのですが、人がたくさんいて入れません。  
先に進むことにします。

つづく

（いしやはるか・文教大学付属中学校三年）

少し行くと高輪大木戸跡です。ここは前に来たことがあります。伊能忠敬は測量をここからスタートさせました。泉岳寺の近くを通って行きま。のどがかわいたので、コンビニで水を買って、近くの公園で飲みました。  
公園からはＪＲの線路がよく見えました。







2007年5月4日 私の旅（門前仲町～品川）  
—「富岡八幡宮から川崎まで歩く！」（その1）—

補訂・菅茶山から伊能忠敬に贈られた詩

第五四号に掲載された『神石高原町に設立された四基の伊能測量碑』を読まれた村山吉廣先生（早稲田大学名誉教授・漢文学者）より、記事中の「菅茶山



菅茶山肖像（菅茶山頭彰会）

から伊能忠敬に贈られた詩」（十二頁下段）について、お手紙にてご教示をいただきました。左記に注を掲げ、下記に読み下し文と訳を掲載します。

漢文学の権威に第五四号の編集部註の不備・不足を補っていただきましたことを厚く感謝申し上げます。

【注】行次Ⅱ旅程、旅の途中 蔵名Ⅰ名をかくす

酒店の主人として目立たずに励んでいた

玖邱Ⅱ故丘Ⅱ郷里 璿璣Ⅱ天文測量の器械

坐Ⅰいながらにして、その場で 括Ⅰくくる、調べる

三千界Ⅱ高く遠い所 分率Ⅱ測量器械の名称

行Ⅱ歩きながら 馬援Ⅱ後漢時代の將軍

楊炯Ⅱ唐代の詩人 奚囊Ⅱ詩囊 作った詩や句を

入れておく手元の袋

河岳Ⅱ山川、地理

伊能先生奉命測量諸道行次見問賦贈

（伊能先生、命を奉じて諸道を測量す。行次に問はる、賦して贈る）

酒肆蔵名臥故邱 酒肆に名を蔵して故邱に臥し

豈図幕僚命飛輶 あに図らんや幕僚の飛輶を命ぜんとは

璿璣坐括三千界 璿璣坐らにして括す三千界

分率行量六十州 分ち率いて行量る六十州

已識馬援能聚米 已に識る馬援能く米を聚るを

不從楊炯問浮舟 楊炯に従い浮舟を問わず

奚囊我亦收河岳 奚囊我も亦た河岳を収め

愧把生涯供漫遊 愧づ生涯を把りて漫遊に供せしを

【出典】『黄葉夕陽村舍詩』後編三—六

【訳】（題名）伊能先生は幕命を奉じて諸道を測量され、その旅の途中、私の宅を訪問してくださいました。そこで私は次の詩を賦して先生に贈りました。

（詩文）伊能先生は酒屋の暮らしに名を蔵して故郷で過ごしていたが、幕府からいきなりお触れが出て測地の使者としてつかわれようとは、思いがけないことであった。

璿璣を使って、いながらにして三千界をしらべつくし、分率を使って道すがら六十州を測量した。後漢の馬援が天子の前で米を山盛りに集めて、この米の山を使って軍の進路を説明した故事があるが、先生は馬援に劣らず地理に詳しい。楊炯に従って浮舟を問わず（この句、意味不詳）。詩句を入れる袋をいつも持ち歩いて全国いたるところで私（茶山）も詩を作ったが、ただ生涯漫然と旅を重ねただけで、先生のように立派な地図の仕事を樹立しなかったことが恥かしい。

## 柏木家に残された忠敬資料

柏木 隆雄

源氏物語は千年昔のロマン。諸々の記念行事が紅葉盛りの京都の街に一層の彩りを添えていた。その京都の旅から戻って間もなくの十一月二十六日、私は二百年昔の伊能忠敬のロマンを追って、佐倉の国立歴史民俗博物館を訪ねた。歴博（以下略称使用）に寄託してある柏木家に残された忠敬関連資料の閲覧を申し込んでいた。

歴博は、佐倉藩堀田侯の城址に建てられている。忠敬プロジェクトの司令塔だった堀田攝津守とも縁りの土地である。

閲覧の許可が下りてから、同行を希望していた片桐一男氏（青山学院大学名誉教授）のほかに、忠敬研究会の会員の方にも声をかけたが都合が得られずに、結局は二人だけの閲覧となった。片桐先生は、長崎歴史物語に詳しく、出島貿易やカピタン等の著作も多く、出版されたばかりの『それでも江戸は鎖国だったか』が歴博内の書店に平積みされていた。当日、立合ってくださった歴博の山本光正教授とは、法政大学大学院史学専攻での先輩、後輩の間柄であったのも偶然の出会いだった。

寄託資料は五十九点、その目録を本稿の末尾に掲載した。全ての資料が忠敬と何らかの関りがあると思われるが、私なりに興味深いものを選び、その紹介と、少々の説明を施した。と言っても私は学者でも研究者でもない。忠敬の身内の子孫の一人として感想を述べるだけ。ご容赦いただきたい。

### 一、シーボルト事件関連の書簡と書付

「資料①」は、高橋作左衛門景保から、シーボルトの通詞、吉雄忠次郎宛の書状。

景保が幕府の秘図である伊能図ほかをシーボルトに渡し、国禁を犯した容疑で召捕られたのが文政十一年十月十日の真夜中。この書状の日付が十月十六日となっていることは、逮捕監禁後に、奉行所内で書かされたことになる。

シーボルト研究関連の書物によると、簡井伊賀守江戸町奉行は、問題の伊能図ほかの回収が緊急の要務と考えて、自作の文案を示し、景保に書かせて、それを早飛脚で長崎に送ったとなっている。

『シーボルトの日本史』布施昌一著（木耳社）には、ほとんど同文の書状が掲載されていたので、その全文を記す。

資料①と見比べて

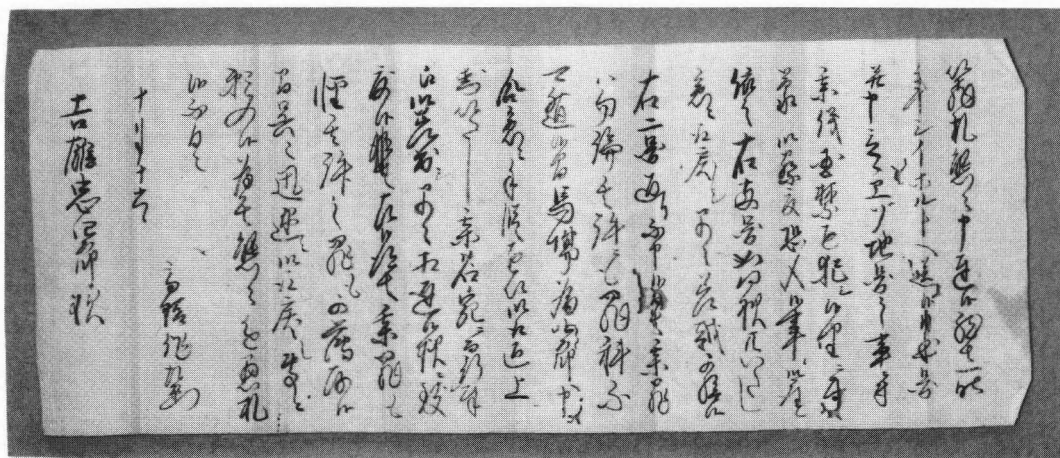


歴博での資料閲覧

片桐一男

山本光正

柏木隆雄



資料① 高橋景保書簡（吉雄忠次郎宛）

異なる点は、日付がなく宛名人が、末永と吉雄の両通詞となつていただけ。従つて資料①は、同文の何枚かの中の一枚か、または後日、それからの写し文かも知れない。筆跡が景保のものかを、景保から忠敬への書状で検討してみたが、私には判断できなかった。

資料①とほとんど同文の書状

『シーボルトの日本史』布施昌一著（木耳社）より

早飛脚を仕立てるほど急を要した割には、飛脚が江戸を發つたのが十月二十五日、その六日後の十一月一日に長崎に到達、シーボルトに伝えられたのは、それから数日後という悠長な日時の流れが気にかかる。

「資料②」この書付は、事件発覚により、景保以外に詮議を受けた関係被疑者の、役職・氏名・仮処分を、当番目付の本目帯刀が記した報告書と思われる。

頭の部分が切れているが、記されている川口源次、岡田藤助、門谷清治郎、吉川克蔵、永井甚左衛門は、いずれも景保の配下にして伊能図にも係つた者共である。長崎屋源右衛門は、シーボルト江戸参府時に宿とした日本橋本石町の長崎屋の当主。

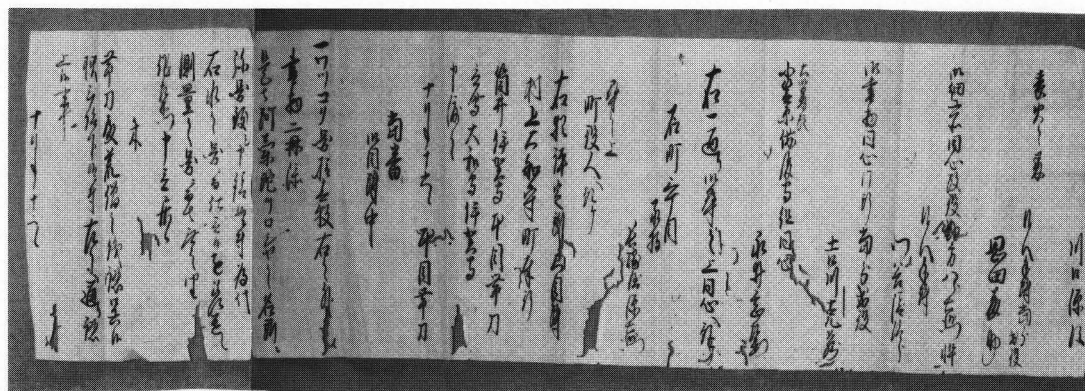
長い詮議の期間を経て、事件の被疑者に判決が下つたのは、文政十三年三月。この内容を報らせる封廻状が伊能家資料にも存在する。因みにその内容を抜すいする。

飛脚を以て態々<sup>わざわざ</sup>申述べ候。然者<sup>しかれば</sup>一昨年シーボルトへ送り候日本並に蝦夷地の図の書付、御察度<sup>さつど</sup>を蒙り恐入る事に御座候。之に依り右両図如何様にも致し、急々取戻し、早々御差越し給るべく候。右両図返り申さず候ては某は勿論其元<sup>そのもと</sup>にも罪過直ちに参るべく候。馬場為八郎申し含み、急に手段を以て取返し、上封致し、某名宛にて奉行所へ御差出し、早々相達し候様致し度候<sup>たま</sup>。左候得ば某罪も滅ずべく、其許の罪過も薄かるべしと存じ候間、呉々も迅速御取戻し專一頼み存じ候。其の為態々愚札を進候。不具

末永甚左衛門様  
吉雄忠次郎様

高橋作左衛門





表火之番 川口源次  
御細工所同心改役勤方 同人手附 岡田藤助  
御書物同心同断 門谷清治郎  
大御番頭 吉川克蔵  
小笠原備後守組同心 永井甚左衛門  
右一通り御尋之上同心へ預ケ 石町三丁目 家持 長崎屋源右衛門  
尋之上 町役人へ預ケ  
右猶評定所大目附 村上大和守町奉行  
筒井伊賀守 本目帯刀  
立会 大和守、伊賀守  
申渡之 十月十六日 本目帯刀  
当番 御目附中  
一、ワッコー図拾壹枚 右之外  
書物二冊添 是は阿蘭陀、ヲロシヤ之名所ニ  
線図致シ申請候二付、為代  
石(赤)水之図ニては無之由  
作左衛門申立居候  
朱  
帯刀殿荒増之儀認呉候  
様被仰下候二付 左之通り認  
上候事  
十月十二日

## 資料②

## シーボルト関係の書付

川口源次、吉川克蔵、門谷清治郎は、江戸十里四方追放、永井甚左衛門は江戸払い、岡田藤助(東輔)は、景保逮捕後に屋敷内で自害しているの、ここに記載はない。

ワッコー図拾壹枚——以下は、景保宅から押収した証拠品か、または景保の自白内容か。

末尾の日付は十月十二日、景保逮捕からまだ二日しか経っていない。伊能図の授受が発端となった事件だけに、伊能家にも嫌疑が及ぶ心配はあったと思う。

事件の発覚直後から、情報は伊能家にも伝えられた。間宮林蔵が伊能家を訪れ、事件への心構えなどの注意を与えている記録が残っている。資料①、②も幕府内の裁く立場に近い筋からの情報の一部かもしれない。

## 二、近藤重蔵の長崎絵図

資料③④⑤ 近藤重蔵が所蔵していたものを、忠敬が譲り受けて愛蔵していたのが、この『長崎之図』である。

点在する島々、真上から俯瞰した扇形の出島、愛宕山を背にした碁盤の目の町割り、赤い鳥居と森の中の諏訪神社、湾内には三本マストに横三色旗の二隻の阿蘭陀船と、赤旗を掲げた同じく二隻の中国船。本誌ではカラー写真でお見せできないのが誠に残念。

資料③『長崎之図』の下段に押された朱印の一部が欠損しているが、重蔵の雅号は「正齋」。絵図の裏面にも「正齋蔵」の朱印が押されている。

近藤重蔵珍蔵(資料④)の近藤重蔵は本人の署名。"珍蔵"は忠敬が書き入れたものか、"珍"はめずらしい、のほかに"無類"という

意味もある。

資料⑤は、港湾風景の拡大図であるが、海上に朱の直線が走っている。忠敬測量隊が書き加えたものかは判らないが、例えば、出島近くの大船渡の海岸から対岸の稲佐崎の船津までは「五丁五十間」と距離が記入されている。水深も大船渡側で「深さ四尋」、船津側で「深さ三尋」との書き込みがある。他の朱線にも同じく記入がある。

この絵図が、いつ重蔵から忠敬に移譲されたかは定かではない。重蔵が長崎奉行付として赴任したのは寛政七年（一七九七）、江戸に帰着するまでの長崎在任二年の間に、重蔵はこの絵図を蒐集したのであろう。

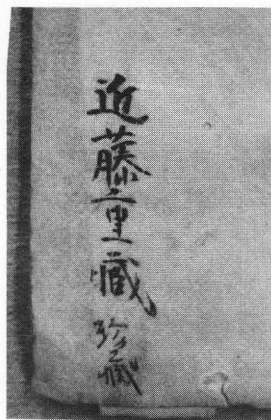
忠敬の江戸日記で、重蔵との出合いを調べてみる。第七次測量が終わって江戸帰着の日から、第八次測量出立の日までの日記に、二人の度々の往来が記されている。第八次測量の日程の中には、長崎測量が含まれているから、この時期に『長崎之図』の授受があったのではなからうか。

忠敬日記の文化十一年六月

資料③



資料④



十一日には、このような記述がある。「——近藤重蔵、御朱印帳九冊返す。」忠敬が重蔵に貸与していたものが戻ってきたのか、または重蔵から借受けたものを返したのか、解釈に迷うところであるが、私は借りたものを返したとみる。『長崎之図』を見て、「御朱印帳」の意味が解けた。重蔵は自分の蔵書類には「正齋蔵」の朱印を押しているからだ。この時期、忠敬は第八次測量（二度目の九州）から帰着して間もない。数日前には、黒江町から亀島町に引越をしている。新しい御用書で、長崎を含む地図の作成に取りかかるので、参考となる『長崎之図』は、重蔵への返済物に含まれていなかった。

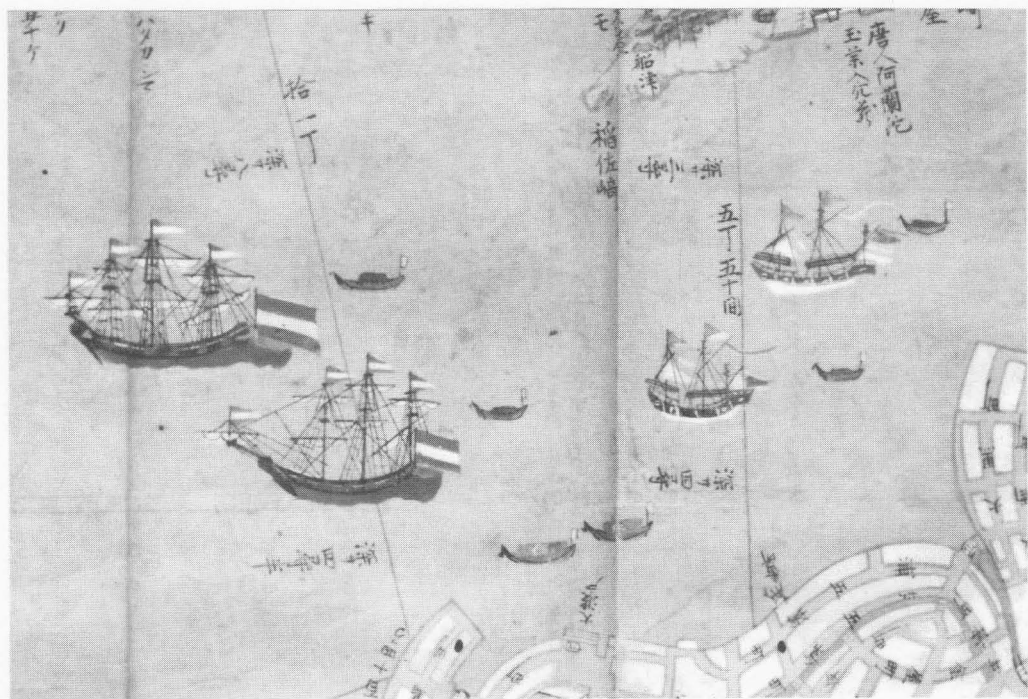
### 三、先祖書

資料⑥は、伊能三郎衛門家と柏木家の先祖書である。

忠敬研究会による前回の調査（平成十四年十二月）で刮目の発見とされた重要資料である。伊能家中興の祖、伊能老岐守の冒頭の記載から代々の戒名、没年月日の下段に所々説明が記されている。発心院無覚居士（七代目・三郎右衛門昌雄）には、「柏木久兵衛先祖、但し三男、椎木・新町に分地」の書き込みがあった。これを受けて性寿院（初代柏木久兵衛）の欄には、「無覚（昌雄）三男久兵衛先祖、一代」と記入されている。

調査に立合った佐久間達夫氏は、この記述を、伊能家『家牒』と照合するなど、丹念に分析した結果、昌雄の三男は、柏木乙右衛門幸七であると結論づけた。

昌雄死去の際には、伊能家から柏木久兵衛家に椎木の広大な土地が下賜されている。（伊能家『家牒』代々の柏木久兵衛墓石の中で幸七の墓石の側面には「柏木氏・幸七」と改った刻字がある。



資料⑤ 『長崎之図』 港湾風景



初代柏木幸七、二代目の乙右衛門と弟の時右衛門、三代の音右衛門は忠敬と忠誨の日記にもしばしば記述が見られる。縁者一番の接し方である。寛政十二年閏四月の第一次測量出立の日、柏木幸七と倅の時右衛門は、嗣子、景敬と共に江戸千住まで見送りに出た（忠敬日記）幸七にとっては、孫に当る忠敬の二男・秀藏の旅立ちの晴れ姿も見たかったのであろう。

幸七の娘の妙諦が達の亡きあと、忠敬の継室を勤めたのも、伊能家に於ては、自然の成行きだったと思われる。

【注】先祖書で昌雄が、三郎右衛門八代目となっているが、七代目が正しいとされている。息子の景慶と弟の長由との間の、没年月日による違いである。

この項は、佐久間達夫氏の私家版『伊能三郎右衛門家の裏方として尽した柏木久兵衛』を参考にさせていただいた。なお拙著には、本誌三十三号に寄稿した『伊能忠敬と柏木家の人々』がある。

（次号につづく）

# 【資料】

（かしわぎ たかお・税理士・作詞家）

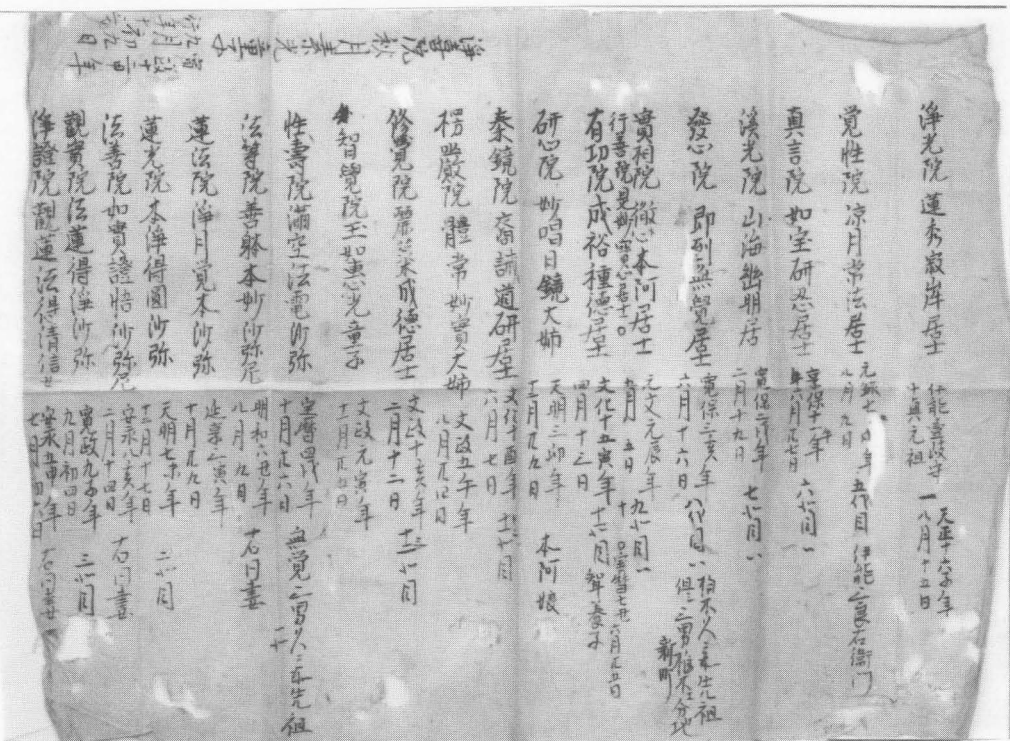
歴博への寄託者 香取市佐原 柏木俊一  
写真撮影 成田市 佐藤 勲

## 【次号予告】

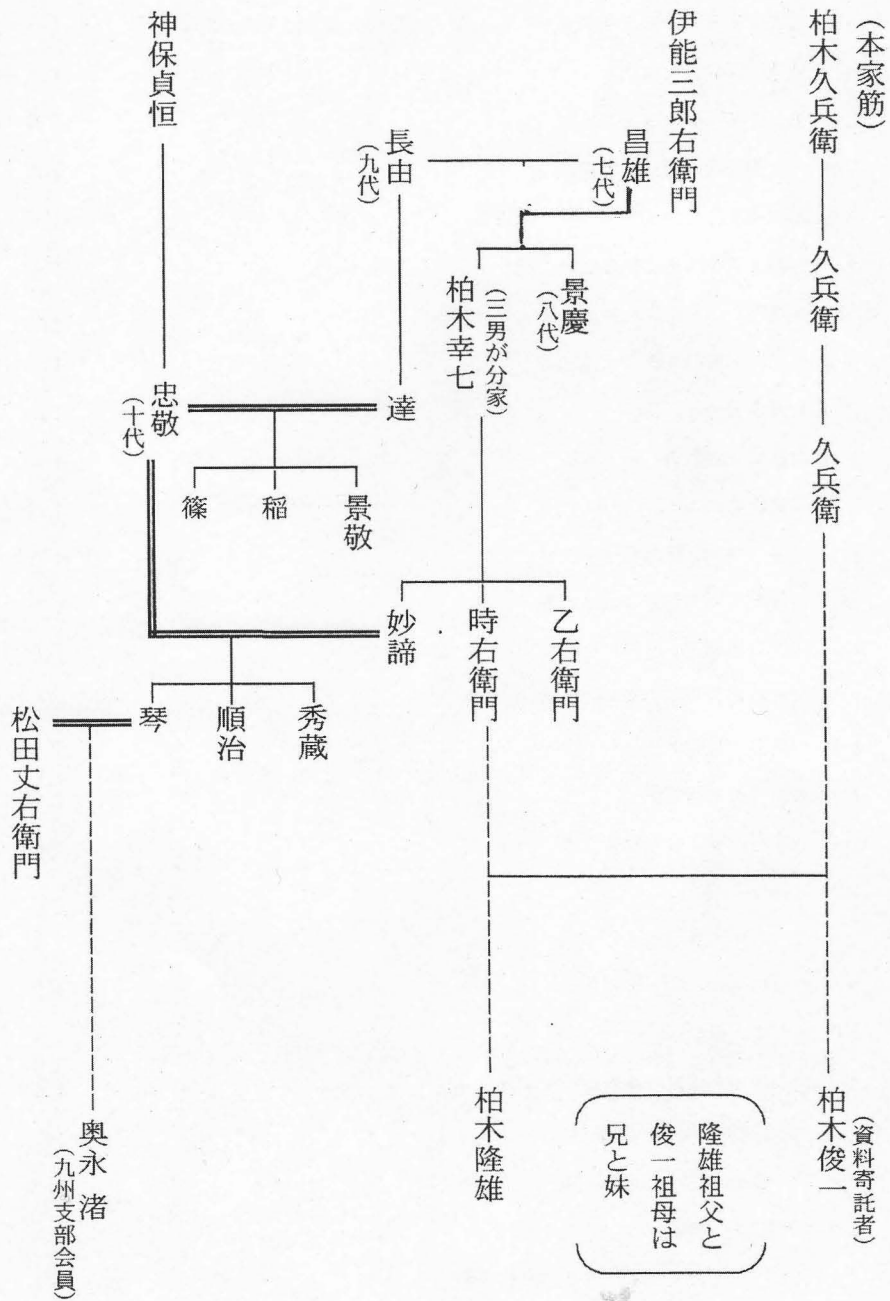
- ・ 法隆寺の伽藍境内の図（手書彩色）
- ・ 江戸御城周辺図（手書彩色）
- ・ 大坂木版図・畿内絵図（彩色）
- ・ 地球一覽図（木版手彩色）

## 資料⑥

伊能三郎右衛門家と柏木家の先祖書







## 別紙1

〔寄託資料〕伊能忠敬関係資料のうち（T-12）

1-1 服部備後守様松前会所御通り 日記写・大橋御伝掛替出来形帳之写	1点
1-2 地球全図略説（木版）	1点
1-3 天草備考 卷之七（写本）	1点
1-4 丹後国天橋山智恩禅寺記録	1点
1-5 和州式上郡長谷寺 境内并宝物書上	1点
1-6 龍田大明神本宮立物間数等之記	1点
1-7 美濃国一ノ宮南宮社堂御修復所等覚帳	1点
1-8 日向国宮崎郡 神武天皇	1点
1-9 心願書留	1点
1-10 由緒書 親類書	1点
1-11 （給金控）	1点
1-12 天保三辰年目録（金銭出入覚）	1点
1-13 丹後国天橋山智恩寺仮名縁記	1点
1-14 北陸道大社正一位勲一等気比太神宮御鎮座拔書	1点
1-15 （寺社行列・過去帳・諸書留）	1点
1-16 （諸国人口書上）	1点
1-17 大樹寺御由緒略記	1点
1-18 法隆寺仏閣雲仏宝物等目録	1点
1-19 墓碑建設願	1点
2-1 状（三州高月院書上）	1点
2-2 状（娘の件につき書状）	1点
2-3 状（書状断簡）	1点
2-4 状（伊能三郎家事後見につき一後欠一）	1点
2-5 （人馬使用許可力一断簡一）	1点
2-6 状（養子一件）	1点
2-7 （伊能忠敬心願一件）	1点
2-8 状 近江国犬上郡多賀大社并末社尊書	1点
2-9 状（忠敬書状力）断簡	1点

別紙2

2-10 状 (伊能勘解由履歴書上断簡)	1点
2-11 状 (里程書上)	1点
2-12 状 (シーボルト事件につき)	1点
2-13 状 (先祖書)	1点
2-14 状 (小片) (里程書上)	1点
2-15 状 (シーボルト事件関係カー前欠一)	1点
2-16 伊能忠敬略譜	1点
2-17 状 為取替申議定証文之事 (家督相続につき)	1点
2-18 状 (年号一覧)	1点
2-19 状 (断簡)	5点
3-1 近江国大絵図 全 単彩 (内題 近江国細見図)	1点
3-2 改正 和泉国大絵図	1点
3-3 大和国大絵図 全 単彩 (内題 大和国細見図)	1点
3-4 増補改正 河内国細見図全 (内題 河内国細見図)	1点
3-5 山城州大絵図 全	1点
3-6 地球一覧図 全 (木版手彩色)	1点
3-7 但馬国大絵図 (内題ナシ)	1点
3-8 (大坂図木版両面刷彩色)	1点
3-9 金沢八景之図	1点
3-10 (佐原地割図)	1点
3-11 (江戸図 手書彩色)	1点
3-12 (譜州小豆嶋之図) 手書彩色	1点
3-13 大和国法隆寺伽藍寺院境内之図 手書彩色	1点
3-14 長崎之図 (彩色)	1点
3-15 (絵図断片)	2点
3-16 (木版画断片)	一括

計54件59点

# 全国の居城陣屋の所在地と領主名記述

## 伊能忠敬測量の能率と安全対策か？

佐久間 達夫

伊能忠敬は、日本全国の海岸線と主な街道を測量した際、測量の様子を測量先で書き留めた日記と、これを後で書き直した日記とに残している。前者を「忠敬先生日記」といい、五十一冊あり、後者を「測量日記」といって二十八冊ある。日記の表題は、昭和二十六年に表紙を修理したときにつけた名称である。

二つの日記の記述内容と比較すると、「忠敬先生日記」の方では、第一次測量から第四次測量までは、測量が幕府の支援事業であったので、忠敬が測量時に通過した村々から提出された資料を基にして、村名、村高、支配、家数、人数などをかなり克明に記述している。

第五次測量からは、測量が幕府御用の事業となったので、諸藩に村の様子を記した「書上」の提出を義務づけたので、それらの内容は「日記」には記さずに、別帳にまとめたようである。

次に示す「国々居城陣屋附」がその記録と推察される。この記録は、国の重要文化財に指定されて、香取市佐原の伊能忠敬記念館に所蔵されている。

### ○ 国々居城陣屋附一覧

「国々居城陣屋附」の記述内容を見ると、日本全国六十八か国の居城、陣屋、番所、関所などの所在地と領主名が詳細に記されている。これは忠敬が、測量が安全に、しかも能率的に行われるように記述したものであろう。筆者は記録を繙いたとき、「よくもここまで記述したものだなあ」と、驚嘆してしまった。巷間では、伊能忠敬は、測量を隠れ蓑にして、幕府の命令で諸藩の情報収集を行っていたのではないか、と言っている研究者もいる。

#### 資料一 『国々居城陣屋附』

伊能忠敬記念館所蔵

#### ● 阿波国

・居城	名東郡 徳嶋	松平阿波守
・陣屋	海部郡 鞆浦山下	松平阿波守
同郡	日和佐浦奥河内	右同人
三好郡	池田村峯安	右同人
板野郡	岡崎村吹上	右同人
同郡	北泊浦牛浦	右同人
・番所		
川口番所	二十ヶ所	松平阿波守
口留番所	九ヶ所	右同人
遠見番所	八ヶ所	右同人
見張番所	十七ヶ所	右同人
船改番所	一ヶ所	右同人



讃岐国

・居城

那河郡 柞原郷 円亀(丸亀)  
香川郡 野原庄 高松

京極能登守  
松平讃岐守

・陣屋

多度郡 多度津郷 多度津

京極壹岐守

・番所

口留番所 七ヶ所  
遠見番所 十二ヶ所

京極壹岐守  
松平讃岐守

同

浦 番所 二十八ヶ所

松平讃岐守

船着番所 九ヶ所

京極能登守

口留番所 一ヶ所

右同人

川口番所 一ヶ所

京極能登守

山口番所 一ヶ所

京極能登守

伊予国

・居城

宇和郡 板島郷 宇和島  
喜多郡 久米郷 大洲村大洲  
温泉郡 味酒郷 松山

伊達遠江守  
加藤遠江守

温泉郡 味酒郷 松山

松平立丸

蔵敷村今治

松平壹岐守

・居所

温泉郡 味酒郷 味酒村三之廓  
喜多郡 平郷 上新谷村新谷

松平立丸  
加藤出雲守

宇和郡 板島郷 宇和島城郭内

浜屋敷

伊達遠江守

新居郡 加茂郷 神津村西条

松平左京大夫

宇摩郡 山田郷 川之江村

本陣松平立丸

周布郡 井出郷 新屋敷村楠凌村

御預所

宇和郡 立間郷 立間尻浦吉田

一柳兵庫

宇摩郡 真ノ庄山口郷 三嶋村

伊達若狭守

・番所

松平壹岐守

遠見番所 十ヶ所

浜番所 一ヶ所

見張番所 三ヶ所

川口番所 四ヶ所

口留番所 十四ヶ所

土佐国

・居城

土佐郡 大宇坂村 高知山  
土居屋敷 五ヶ所

松平土佐守

・番所 一ヶ所

境目番所 六四ヶ所

口留番所 四四ヶ所

遠見番所 十ヶ所

内番所 十八ヶ所

● 淡路国（現兵庫県）

・居城

津名郡 洲本

・陣屋

津名郡 由良浦神宮寺谷

同郡 岩屋浦窪中

同郡 江井浦配

同郡 福良浦坂

・番所

川番所

見張番所

松平阿波守

松平阿波守

右同人

右同人

右同人

松平阿波守

右同人

（以下国名のみ記す）

● 国名

山城 大和 河内 和泉 摂津 伊賀 伊勢 志摩 尾張

三河 駿河 遠江 甲斐 伊豆 相模 武蔵 安房 上総

下総 常陸 近江 美濃 飛騨 信濃 上野 下野 若狭

越前 加賀 越中 越後 佐渡 丹波 丹後 但馬 因幡

伯耆 出雲 石見 隠岐 播磨 美作 備前 備中 備後

安芸 周防 長門 紀伊 筑前 筑後 豊前 豊後 肥前

肥後 日向 大隅 薩摩 壱岐 対馬 陸奥 出羽

※ 注釈

・陸奥は、明治元年に磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥に五分割され、

出羽は、羽前、羽後に分ける。

・能登国は不記述。

○ 領主よりの贈り物

伊能測量隊には、全国測量時、測量先の領主から贈り物があつた。初期の段階では品物を受領していたが、回数が多くなるにつれて品物を持参して測量業務を行うことは困難であつたので、品物をお金に換金して貰つた。

全国的にみると、四国と九州の諸侯からの贈り物が多かった。次に四国での贈り物について記してみよう。

資料二

領主よりの贈り物

伊能忠敬測量日記 佐久間達夫校訂より作成

・文化五年三月七日 淡路国洲本にて松平阿波守より贈之。

織鑑鈍 一箱、五色素麵 一箱、寒製飴 一桶。

・同年三月二十二日 徳島城下にて松平阿波守より贈之。

・伊能勘解由 雁皮紙 千枚、鯉節 一箱。

・内弟子・侍の四人 鼻紙 壱匁宛。

・僕三人 刻煙草 一包宛。

・同年五月六日 土佐国高知城下にて松平土佐守より贈之。

・伊能勘解由 土佐鯉節 百本、小杉原 三十帖。

・下役（坂部貞兵衛、芝山伝左衛門、下河辺政五郎、青木勝次郎）

土佐鯉節八十本宛、小杉原 二十帖宛。

・内弟子（伊能秀藏、久保木佐右衛門、植田文助）

土佐鯉節五十本宛。

・侍・棹取の三人 金百疋宛。

・伊能の草履取（藤吉）銀貳両。

・下役の草履取四人 銀貳兩宛。

・同年六月二十六日 伊予国宇和島にて伊達遠江守より贈之。

・伊能勘解由 綾布 三反、金三百疋。

・下役四人 綾布 貳反宛、金貳百疋宛。

・伊能秀蔵 綾布 壹反、金百疋宛。

・久保木佐右衛門、植田文助、神保庄作 金百疋宛。

・久保木佐助、善八 銀貳兩宛。

・下役の僕四人・藤吉 青銅三百宛。

・同年閏六月十一日 伊予国宇和島にて。伊達遠江守より贈之。

・伊能勘解由 真綿 三把、金貳百疋。

・下役四人 真綿 二把宛、金百疋宛。

・伊能秀蔵 真綿 一把、金百疋宛。

・久保木佐右衛門、植田文助、神保庄作 金百疋宛。

・久保木佐助、善八 白銀 貳兩宛。

・下役の僕四人・藤吉 青銅 三百銅宛。

・同年六月二十二日 伊予国宇和島城下にて伊達遠江守より贈之。

・伊能勘解由 嶋縮 二反、鯛 三十枚。

・下役四人 嶋縮 一反宛、鯛 十枚宛。

・伊能秀蔵 嶋縮 一反。

・久保木佐右衛門、植田文助、神保庄作 金百疋宛。

・久保木佐助、善八 綾布 壹反宛。

・下役の僕四人・藤吉 銀壹兩宛。

・同年六月二十四日 伊予国宇和島にて伊達遠江守より贈之。

・伊能勘解由 杉原 五束 鯛 三十枚。

・下役四人 杉原 三束宛 鯛 二十枚宛。

・伊能秀蔵 杉原 二束。

・久保木佐右衛門、植田文助 杉原 二束宛。

・神保庄作、久保木佐助、善八 白銀 三兩宛。

・下役の僕・藤吉 白銀 壹兩宛。

・同年七月二十六日 伊予国大洲城下にて加藤遠江守より贈之。

・伊能勘解由 綾布 三反、中折紙 二十束。

・下役四人 綾布 二反宛、中折紙 十束宛。

・伊能秀蔵 綾布 一反、中折紙 七束。

・久保木佐右衛門、植田文助、神保庄作 綾布 一反宛、中折紙 七束宛。

・久保木佐助、善八 金一步宛。

・下役の僕四人・藤吉 銀一兩宛。

※ 佐助、善八、藤吉は、金銀断り中折紙と替える。

・同年七月二十六日 伊予国大洲城下にて加藤出雲守より贈之。

・伊能勘解由 蠟燭 一箱(百三十丁入)。

・下役四人 蠟燭 一箱(八十丁入)宛。

・伊能秀蔵、久保木佐右衛門、植田文助、神保庄作 蠟燭 一箱(五十丁入)宛。

・久保木佐助、善八 銀二兩宛。

・下役の僕四人・藤吉 銀一兩宛。

※ 銀は断わり蠟燭と替える。

・同年八月朔日 伊予国三津町にて松平立丸より贈之。

・伊能勘解由 晒布 三反。

・伊能秀蔵 晒布 二反。

・植田文助、久保木佐右衛門 晒布 一反宛。

・庄作、佐助、善八 小杉紙 九束宛。

・藤吉 小杉紙 五束。

・下役四人

・下役の僕四人

晒布 二反宛。

小杉紙 五束宛。

※ 付添村役人へ内談し、売り払う（合計金拾貳両）。

・同年八月二十一日伊予国今治城下にて松平老岐守より贈之。

・伊能勘解由

晒木綿 五反。

・伊能秀藏

晒木綿 三反。

・久保木佐右衛門、植田文助

晒木綿 二反宛。

・庄作、佐助、善八

半紙 三束宛。

・藤吉

刻煙草 三斤。

・下役四人

晒木綿 三反宛。

・下役の僕四人

煙草 三斤宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年八月二十六日伊予国今在家村にて一柳因幡守より贈之。

・伊能勘解由

羽綿 三把。

・下役四人

羽綿 二把宛。

・伊能秀藏

羽綿 二把。

・佐右衛門、文助、庄作

羽綿 一把宛。

・佐助、善八

中折紙 三束宛。

・藤吉、文吉、兵助、文藏、惣助

中折紙 二束宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年八月二十七日伊予国西条城下にて松平左京大夫より贈之。

・伊能勘解由

晒布 二疋。

・伊能秀藏

晒布 一疋。

・佐右衛門、文助

奉書紙 一束宛。

・佐助、庄作、善八

杉原紙 二束宛。

・藤吉

半紙 二束。

・下役四人

・下役の僕四人

奉書紙 二束宛。

半紙 二束宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年九月六日 伊予国三嶋村にて松平老岐守より贈之。

・伊能勘解由

晒木綿 三反。

・伊能秀藏

延紙 五束。

・佐右衛門、文助

晒木綿 一反宛。

・庄作、佐助、善八

延紙 三束宛。

・藤吉

刻煙草 二斤。

・下役四人

晒木綿 二反宛。

・下役四人の僕

刻煙草 二斤宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年九月九日 讃岐国丸亀城下にて京極能登守より贈之。

・伊能勘解由

晒木綿 七反。

・伊能秀藏

晒木綿 四反。

・佐右衛門、文助

晒木綿 三反宛。

・庄作、佐助、善八

晒木綿 二反宛。

・藤吉

鼻紙 三束。

・下役四人

晒木綿 五反宛。

・下役四人の僕

鼻紙 三束宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年九月十八日 讃岐国高松城下にて松平讃岐守より贈之。

・伊能勘解由

晒木綿 五反。

・秀藏、文助、佐右衛門、庄作

晒木綿 二反宛。

・佐助、善八

鼻紙十五束宛。

・藤吉

鼻紙 五束。



・下役四人

晒木綿 三反宛。

・下役四人の僕

鼻紙

※ 贈り物を売り払う。

・同年十月二日 讃岐国多度津にて京極彦岐守より贈之。

・伊能勘解由

縞縮緬 二反。

・伊能秀藏

小菊 二十束（秀藏へ御贈物、下役衆同

様故、付添政所瀬平をもつて、減少を申遣す）

・佐右衛門、文助

小菊 十束宛。

・庄作、佐助、善八

小菊 七束宛。

・藤吉

小菊 五束。

・下役四人

小菊 二十束宛。

・下役四人の僕

小菊 五束宛。

※ 贈り物を売り払う。

・同年十月七日 讃岐国高松城下にて松平讃岐守より贈之。

・伊能勘解由

鯖子 一籠。

・伊能秀藏

杉原 一束五帖。

・佐右衛門、文助

杉原 一束宛。

・庄作、佐助、善八

刻煙草 一包宛。

・藤吉

刻煙草 一包。

・下役四人

杉原 二束宛。

・下役四人の僕

刻煙草 一包宛。

・同年十一月十七日 淡路国岩屋浦にて松平阿波守より贈之。

・伊能勘解由

琥珀丹後袴地 一下。

・伊能秀藏、佐右衛門、文助、庄作

足袋七疋宛。

・佐助、善八、藤吉

刻煙草 五斤宛。

・下役四人

京奥縞 一反宛。

・下役四人の僕

刻煙草 五斤宛。

※ 贈り物を売り払う。

### 資料三 第六次四国・大和路測量日記

佐久間 達夫校訂より。

文化五年五月六日付。

朝晴天。江戸暦局へ当所幸便に書状一封頼む。当国主（松平土佐守）より我等（忠敬）へ土佐鯉節百、小杉原三十帖、下役四人（坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、下河辺政五郎、青木勝次郎）へ土佐鯉節八十宛、小杉原二十帖宛、内弟子三人へ土佐鯉節五十宛、棹取三人へ金百疋宛、草履取藤吉へ銀貳両、下役中四人草履取も同断銀貳両宛御贈惠。御使町奉行下役楠目虎之丞、麻上下にて来る。（以下略）

### 注釈

織鯉節（せんうんどん）小麦粉をこねて細く切ったうどん。

五色素麺（ごしきそうめん）青、黄、赤、白、黒の五色に染め分けた素麺。

綾織の布。

縞縮緬（しまちりめん）お召縮緬。

晒布（さらしめ）漂白した麻布、綿布。

琥珀丹後袴地（こはくたんごはかまじ）今の京都北部で産出した織物

京奥縞（きょうおくじま）サントメ（インド東岸にある地名）縞の一種。紺と黄色みを帯びた茶色との縦縞。

中折紙（なかおりがみ）半紙などの真ん中を二つに折って懐中に入れていた。

ていた。

奉書紙（ほうしよがみ） 上等のコウゾの皮を選んで原料とし、白米の

粉末を加えてすいた最上等の日本紙。

小菊（こぎく）

下等の和紙、鼻紙などに使う。

延紙（のべがみ） 小型の杉原紙、鼻紙に用いる。

雁皮紙（がんびし） 西日本に多い沈丁花の落葉灌木、雁皮の樹皮を原

料とした和紙。「斐紙」ともいう。

小杉原（こすぎわら）

播磨国杉原谷で初めて産出した紙で、コウゾ

小杉紙（こすぎし）

を原料とし、米粉を混ぜてすいた紙。鼻紙な

どに用いる。

○ 四国霊場八十八か所の札所に宿泊

測量先の宿泊所は、主に庄屋や寺院であった。伊能測量隊は、四国測量時、沿海・街道から数多くの神社・寺院の門前までの仕越測量をしたり、寺社に立ち寄って建築物や宝物の見学をしている。四国では、次の「四国霊場八十八か所」に立ち寄ったり、宿泊している。

#### 資料四

伊能測量隊が宿泊した寺院

・文化五年四月二十三日

本陣 四国二五番札所 宝珠山津照寺 現室戸市

・文化五年六月二日

本陣 四国三八番札所 蹉跎山金剛福寺 現土佐清水市

本陣 嘉宝坊 脇本陣 隆蔵坊

・文化五年四月二十三日

四国二四番札所 室戸山最御崎寺 現室戸市

最御崎寺の大師堂まで仕越測量する。

・文化五年四月二十四日

四国二六番札所 竜頭山金剛頂寺 現室戸市

寺続きの山へ登りて山々を測る。濛気多くして遠山遠島不見。

・文化五年五月一日

四国三一番札所 五台山竹林寺 現高知市

風景よし。

・文化五年十月二十六日

四国八六番札所 普陀洛山志度寺 現さぬき市

古筆画を一覧す。

#### 資料五

諸藩の江戸屋敷への挨拶

「忠敬先生日記 二四」

伊能忠敬記念館所蔵

・文化六年二月二十二日

朝晴曇。桑原へ行く。夫より堀田摂津守殿山田綱治郎へ、中国三分図持参。夫より松平土佐守殿、松平阿波守殿、雉子橋通小川町松平老岐守殿、牛込御門内松平讃岐守殿、下谷御徒町加藤遠江守殿、浅草タンボ加藤出雲守殿へ国々廻浦の節御贈物の札に罷越す。

#### □ 手札

測量御用に付、御領分廻浦仕候節、御国産の品々銘々へ被下、難有仕合奉存候。右御札参上仕候。伊能勘解由。

夫より高橋御役所へ立寄る。此日高橋氏安産あり。八ツ半後に帰宿。此日も余寒。

・二月二四日

朝より晴天、朝濛気あり。五ツ後より出立。南八丁堀伊達若狭守

殿へ、国産贈物の礼に越す。渋川主水へ立寄る。主水殿と善助に对面。夫より愛宕下一柳因幡守殿、同松平立丸殿、虎御門外京極能登守殿、芝切通しより赤羽根小沢権右衛門へ立寄る。夫より麻布六本木京極老岐守、麻布龍土伊達遠江守殿、青山百人町松平左京太夫、国々廻浦の節国産贈物の礼に罷越し、七ツ後に帰宿。

「国々居城陣屋附」の文書から、標本として四国部分を抽出した。

四国の居城は、徳嶋・丸亀・高松・宇和島・大洲・松山・今治・西条・高知・洲本にあり、松平阿波守、京極能登守、松平讃岐守、京極老岐守、伊達遠江守、加藤遠江守、松平立丸、松平老岐守、加藤出雲守、松平左京太夫、一柳因幡守、伊達若狭守、松平土佐守が藩主であった。

これらの藩主は、使者をたて、測量隊の宿泊所に贈り物として、国産品や日用品などを届けた(資料一・二参照)。特に伊達遠江守は四回、松平阿波守は三回、松平讃岐守と松平老岐守は二回贈り物を差し出している。

それに対して伊能忠敬は、測量が終わり江戸へ帰着後、測量御用の際に贈り物を頂いた諸藩の江戸屋敷に出向き、贈り物の礼をしている。

番所も、川口、口留、遠見、見張、船改、浦、船着、山口、浜、境目、内、川と、各藩によって名称が異なっているものもあるが、藩の重要な場所にそれぞれ置かれていた。

伊能忠敬は、全国測量によって、膨大な地域の情報を収集することができ、それをもとにして、「大和国寺社霊宝録」や「国々居城陣屋附」などという記録を残した。

これらの記録が、伊能測量隊にとって、測量作業を円滑に進めると

めのものであったのか、また、測量という大義名分のもとに藩内の情報収集も兼ねていたのか。現在、研究者によって意見が分かれている。私は、前者であると思う。なぜなら佐原の伊能忠敬記念館で所蔵している前記史料が、幕府提出の原本の控えであったならば、原本提出後、控えは焼却して残しておかないであろう。

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)



横芝光町 栗山川 2008.4 江口俊子氏画



## 伊能塾

第二回例会（十一月九日実施）再録

○講演一「伊能家と縁がありました」 講師・伊能 陽子さん

一、縁がありました

お配りした小冊子（※文末参照）は、洋の小学校の同級生で現在富士宮市にある大きなリハビリ病院の院長をなさっている高橋伸忠さんと私が、その病院が年一度開催する講演会で対談した時の内容をまとめたものです。たくさん送っていただいたので、今日はこれに沿ってお話をすすめたいと思います。

私は伊能家にお嫁に来て、たまたま忠敬先生と縁ができました。

チユウケイ

夫は次男なので関係ないと思っていたのですが、武蔵大学で化学の教授をしていた伊能家七代目である兄・敬が亡くなり、現在のようになになりましたが、とても運命的なものを感じます。兄・敬が亡くなりましたのが平成七年四月七日でしたが、その前日の四月六日に渡辺さんの記事が新聞に出ました。近所に住む元国土地理院長の金窪さんに奥様を通じて渡辺さんはどんな方ですかと伺ったら、「面白いおじさんだよ」ということでした。それを兄に言おうと思いましたが死去してしまつて……。その後渡辺さんに私が電話して、それからいろいろのことが始まりました。ペイレさんの地図を日本に持つてきて佐原でフランス中図里帰り展、そして研究会の発足となり、現在に至りました。たった一本の電話で人生が変わつてしまつたと感じています。

二、伊能家の女性たち

兄・敬が『千葉県歴史』に寄せた「伊能家の女性たち」で書き

ましたように、忠敬の遺品は祖母の代までは家の財産として大事に守つてきました。祖母の「こう」は忠敬から五代目にあたり、長女で家つき娘、八十八歳で

亡くなるまで佐原のあの家で暮らしていました。義母の多嘉は鹿児島（たか）の伊地知家（いぢち）の出で曾祖父は島津藩史『旧記雑録』を作った人。父は海軍中将だった伊地知季珍（いぢちすえな）で、榎本武揚の妻・たづの妹が父の二度目の妻という縁戚関係があります。榎本武揚は忠敬の内弟子・箱田良助は忠敬の次男ですから、以前私たちが鹿児島を訪れた際、しみじみと縁のつながりを感じました。多嘉は多くの方に研究してもらおうと史料を佐原市に寄付しました。名義は義父でしたが、実際は義母の考えで行ったことです。祖母・こうも筆まめ、物持ちがよく、好奇心が強い。これは伊能家の伝統でしょうか。家に古文書の反古がたくさん残りましたので、安藤由紀子さんの協力を得て整理をしました。二人で『景利日記』の中に記載されている「地震」について探したことがありました。景利さんという方は記録魔で、実に様々なことを記録したり、石や木の実を集めて保存したりしておりました。おそらく旅僧や旅周りの人々の話を聞いて書いたのだと思いますが、この日記を読むと、赤穂浪士事件が三日後には佐原に伝わっていた、などということもわかります。

芳名録が残っています、会報で紹介しておりますように、大勢の方々（たが）が佐原の旧家や忠敬さんの遺品を見に来られました。祖母はその方たちに遺品の説明をしておりました。今言う学芸員の仕事をやっていたわけですが、義姉の話では大変な名調子だったそうです。遺品の寄贈は昭和三四年で、昭和三六年四月に記念館がオープンしました。私はまだ結婚前でしたが、お蔵に入つて義母の言う通りに片付け



をしました。長持を見て、すぐ大奥を連想しましたね。洋は子供のころ悪さをして閉じ込められたので、お蔵には入りたくないと言っていました。

義母・多嘉はものすごく勉強して、努力して伊能家の人間になった人です。亡くなる直前まで「時間がない、時間がない」と言っていました。そして「孫たちへ」という手書きのコピーを残しました。それによると、伊能家の祖先は大和の国から千葉へやってきましたが、もとは藤原氏でその前は白蛇だったということです。孫たちはしっかりと読んでくれないので私の代で終わりかもしれないと思っています。

この冊子にも書いてありますように、伊能家では代々、先祖の遺品を保存したり整理したり管理したりする仕事は女性の仕事とされておりまして、祖母から義母へ、そして私が受け継いできたわけです。結構大変なこともあります。どうしてこんなことを引き受けたのかしらと思うこともあります。「伊能家は女性でもっている」と書かれた義兄・敬の文を読んで勘違いしたのがちよつとまずかったかもしれないですね。でも節目、節目で不思議と縁があるので、これは運命かなと思っております。

### 三、伊能七家

伊能家に嫁いできて、墓参りなど先祖からの習慣として行われている行事に連なっておりますと、伊能家の一族のつながりを感じます。伊能家には七つの系統がありまして、「伊能七家」と呼んでいます。

佐藤雅美という方が書いた『お白洲無情』という小説があります。主人公は大原幽学という、やはり千葉の香取のあたりで農政改革をした人なのですが、この中に「伊能茂左衛門」が出てきます。茂左衛門（節軒）は伊能七家の一つである茂左衛門家の中興の祖と言われる人

です。茂左衛門家は戦国期の初代が隠居して立てた家で、国学者・楳取魚彦を出した家でもあります。節軒という方は長生きで、一族を取り仕切って七家の合議制で助け合いをしたり、資金をプールしておくなどのシステムを作ったりしました。茂左衛門家の資料は佐倉の国立歴史民俗博物館へ寄託され、佐倉のほうで収蔵されています。

三郎右衛門家はご存じのように忠敬先生が婿養子に入った家です。忠敬の三郎右衛門家での呼び名は「源六さん」です。忠敬さんの三代前には先ほどもお話ししました『景利日記』を書いた記録魔の伊能景利という人がいました。忠敬先生はこの方に大変影響をうけ、記録することの大切さを学んだ

といわれております。

また昌雄という人がおりまして、この方は隠居後、江戸・深川に住んでいて笛の名手だったそうです。

七左衛門家は佐原の横河岸に本家があり、祖母・こうの夫の実家です。洋は祖父の家・七左衛門家門家を継がされました。ですから洋は正式には七左衛門です。二・三代前のことですが、この家から宮内家に嫁入りした方



があります。(今日ご出席の宮内さんの家です。)

権之丞家は佐原の横宿にあり、書道家の伊能静光さんも会員でした。権之丞家の墓石を見ますと、水戸家の側室の流れが伊能家に嫁に來たことがわかります。

平右衛門家は佐原・諏訪神社の宮司の家です。

大作家は八日市場の七郎右衛門豊秋の家で、佐原の伊能記念館の館長・伊能楯雄さんはこの家の方です。

彦作家は、茂左衛門から分かれた家。以上が伊能七家です。

会員のなかにも、もと伊能さんがいらつしゃって、ご夫婦で会員になられている藤田さんは、奥様がもと伊能姓でいらつしゃいます。小池美幸さんも元の姓が伊能さんですが、佐久間先生が調査なさった結果、ご先祖が伊能四郎右衛門さんということが判明しました。

昨今、「伊能」姓というだけで忠敬さんとはまったく縁戚関係がないのにもかかわらず忠敬の子孫と名乗っている方がいらして、対応に困る場合があります。なかにはご自分で信じ込んでしまっているのか、事実無根の縁戚関係を宣伝する方もおられて、あからさまに否定するわけにもいかず、何となくやむやにして済ますこともあります。

また、一方では神保さん(忠敬の父・神保貞恒の実家)、窪谷さん、海保さんのように、二〇〇年前のご縁がずっと続いているというお付き合いもごさいます。中でも会員の藤岡さんは二代にわたって三郎衛門家と結ばれていて、深いご縁があります。

#### 四、伊能忠敬の墓所

忠敬さんのお墓はご存じのように三か所ありまして、浅草の源空寺、佐原の観福寺、多古の平山家墓地です。源空寺は浄土宗ですが、高橋至時先生の側に葬ってほしいという忠敬の願いを受け入れて、ここに

お墓があります。佐原の観福寺は真言宗で伊能家代々の墓所ですが、ここにあるお墓には髪と爪が収められています。山武郡多古町の平山家墓地にも忠敬さんのお墓がありますが、ここは形式だけのお墓です。忠敬さんが伊能家に入るときにいったん平山家の養子になって婿入りしたということと、妻・ミチの母・タミが平山家の出でミチ自身もある期間、平山家で育つたという縁故があるため、建てられたお墓です。なお、平山家は日蓮宗ですが、タミをはじめ伊能家の女性は熱心な日蓮宗の信者が多く、絶対に改宗しなかつたといわれております。

また、佐原の浄国寺は日蓮宗の寺ですが、ここにも伊能家のお墓があります。七左衛門家の墓が一四もありましたが、二〇〇年以上も前のもので表面がすっかり摩耗してしまっていて読めないし、もう古くて墓石が傾いていましたので、整理しました。三郎右衛門家の方はそのまゝ義姉が供養しております。観福寺の七左衛門家の墓は修復いたしました。古い墓を子供たちに残すわけにはいきません。

七左衛門家に残されたのは墓と稲荷だけです。墓については今申し上げました通りですが、稲荷の方は佐原の「宝寿司」の脇にあります。機会がありましたらどうぞ訪ねてみてください。(了)

\* \* \* \* \*

※小冊子『人生の挫折の受けとめ方とその乗り越え方：伊能忠敬翁の足跡をたどって：』【対談】伊能陽子 富士リハビリ病院 長 高橋伸忠(平成一八年六月開催・同病院「心の健康講座」として開催された講演会の記録) 財団法人・富士心身リハビリテーション研究所「所報」No.23・2008・6 別冊

伊能忠敬研究会例会

2008. 11. 9

伊能陽子

☆ご縁がありまして

チュウケイ先生との出会い  
古文書、裏打ち、安藤さん  
七代目敬没(1195) 渡辺さんの記事を見つける  
ペイレさんの地図展  
研究会発足

☆伊能家の女性たち

四人の妻 みち 妙諦 信 栄  
娘(いねー妙薫)嫁(りて)  
五代目 孝(こう)  
六代目嫁 多嘉

☆伊能七家

三郎右衛門(本宿) 六代目景利 七代目昌雄 十代目忠敬  
七左衛門(横河岸)  
茂左衛門(新宿) 楫取魚彦 節軒…小説「お白洲無情」佐藤雅美著  
権之丞(横宿)  
平右衛門(諏訪神社)  
大作 七郎右衛門豊秋(八日市場)  
彦作

☆伊能忠敬の墓所

浅草 源空寺  
佐原 観福寺  
多古 平山家墓地



## 伊能塾

第二回例会（十一月九日実施）再録

○講演二「私の伊能図発見史」PARTI 講師・渡辺一郎さん

### 一、伊能図訪ね歩き

私が伊能図を訪ね始めたのは約三〇年前のNTT時代に、郵政省から委託された郵便局オンライン・ネットワーク構築の責任者として仕事をしていた時でした。二〇〇年前に全国を歩いて測った伊能忠敬を思い出し、本物の伊能図を見て感動しました。残っている伊能図を全部見てやろう。それから伊能図行脚が始まりました。順を追って訪ね歩いた地図を説明します。

①国立国会図書館地図室、古典籍室 最初にここに行きました。「沿海地図小図副本」を見てすごいなと思いましたね。正確さと彩色に。これが二本の脚だけで出来たのかと。その時に相手をしてくれたのが鈴木純子さんと、当時三〇代後半でしたね。機縁です。古典籍室には、シーボルトから取り戻したといわれる「カナ書き特別小図」三枚組が收藏されており、実見しました。このほかに堀田家旧蔵の四国の小図副本があります。

国会図書館訪問のあと、伊能図の所在と現況について文献調査し、現存する伊能図訪問を始めました。主なものを見た順に掲げます。

- ②日本学士院図書室 文政四年中図模写本八枚 東大の副本を謄写。
- ③東京国立博物館 豊橋藩主大河内松平家旧蔵の中図八枚。
- ④早稲田大学特別資料室 享和二年中図二枚 繋ぐと疊六疊分。
- ⑤静嘉堂文庫 カナ書き特別小図控 大槻如電旧蔵。
- ⑥成田山仏教図書館 文政四年中図写本 八枚 美麗 伝来不明。

⑦英国 グリニッチ国立海事博物館 文久年間に英艦アクテオン号が日本沿岸測量をおこなった際に、与えた小図三枚組。

⑧仏国 ペイレ別宅 屋根裏で見つかった中図八枚組。

○伊能図さがしの原点 国会図書館の「伊能日本実測小図」（堀田図）は、日本東半部沿海地図の副本で「堀田文庫」旧蔵。伊能測量の「担当閣僚」であつた若年寄・堀田正敦へ謹呈されたものです。陸軍文庫の蔵書印があり、戦後、陸軍の資料が焼かれたときにもらってきたそうです。私が見たときは、正式に登録されていませんでした。だから目録にもない、という状態でした。鈴木さんに断られたら、見る機会は無かつたでしょう。

地図は大きくて撮影不可能なので、今でも写真はない（どこにも載っていない）でしょう、つまり正式撮影の場には出てこない本物の図なのです。素性のよい図にバツタリ出会ったのは幸運でした。

エーブル氏（米国議会図書館 地理・地図部長）来日時に見せようと思ひ出して貰つたら、かなり痛んでいてイメージが違いました。退色したのですね。まあ三〇年経ったから仕方がないと思いますが。

○伊能図のさがし方 伊能図を見ようと思つても、どこにあるか資料がない。そこでまず『伊能忠敬作「日本全図」』（伊能図）の所在と現況についてという研究ノートを作りました。製本し、仲間内に配布しました。いい加減な冊子ですが、結構役に立ちました。この冊子を出して、研究者として地図を見せてもらおうのです。

○日本学士院 ここは大谷亮吉が名著『伊能忠敬』を書いた時、集めた資料を保存しています。著作は学士院の事業として行つたので、三井財閥に援助を仰ぎ、三井は当時の金で二千元（現在の数億円）を出しました。地図の複写までおこなっており、「日本輿地全図中図」は明治末年に東大にあつた伊能家の控え図を写したものの。計八枚あると



秋岡武次郎氏（地図コレクター）の記録にあります。そのうち二枚のみ軸装してあります。しかしこの地図の写真はなぜか使われていません。また、軸装した関東と中部以外は閲覧させてもらえません。

○東京国立博物館 ここは、たしか三千何百円の特別閲覧料を払って自由に観ることが出来ました。木箱入りのまま中図を出してくれ「勝手に見て下さい」という感じで、実におおらかでした。箱の中には学士院長・菊池大麓博士から、大河内正敏（豊橋藩主家の当主）理化学研究所長宛の借用証書が残っていました。管理なんかしていなかったということですね。今はもう大違いで、色々頼んでも二・三枚しか見せてくれません。

地図の最大は一・五m×二・五m位、重ねて巻いてあって、うまく広げられるわけがない。狭い部屋でやっと拝見しました。

○早稲田大学 神田の一誠堂から早稲田が買ったもの。第二次測量の中図です。旧蔵者は堀田正敦と推測されますが、購入時の所蔵者は教えてもらえません。古書店が言わないのです。「針穴あり」です。

ちなみに第一次測量で作った地図は「針穴なし」です。針を刺して写す方法は、第一次測量ではまだやっていませんでした。第二次測量から「針穴あり」が出てきます。中図も第二次測量後に提出したのが最初です。本図は堀田正敦へ贈呈したと考えられます。試作品としてやってみて、作りやすく実用的なので普及したと思いますね。

○静嘉堂文庫 「カナ書き特別小図」が収蔵されています。シーボルトに渡され取り返したという国会図書館のカナ書きの特別小図と同じ図ですが、北海道、樺太がなく、本州四国九州のみを一枚に描きます。針穴あり。来歴不詳です。多分、シーボルト図の控え図でしょう。大槻如電（博学で知られる漢学者。『言海』の著者大槻文彦の兄）旧蔵というが、如電がいかにして入手したか興味があります。

静嘉堂文庫へ行つて「見せてくれ」と言ったら「公開していない」と断られましたが、前述した小冊子を見せたらドアを開いてくれました。運よく入れたが、大谷氏がいう伊能図は見つからない。探したらこれまで紹介されていない「カナ書き特別小図」が出てきました。

○成田山仏教図書館 ここは私が伊能ものを書いて初めて原稿料一万円をもらったところです。「伊能忠敬実測中図」八枚を所蔵。「針穴無し」。伝来不明ですが、おそらく佐倉の堀田家（戦前に整理）から出たのではないかと思います。大名家は戦後財産を放出した例が多く、その際に伊能図も世間に出ました。徳島大学は蜂須賀家旧蔵の地図を教育学部で購入しました。岡山藩のものは現在行方不明。津軽藩から出たものは国文学研究博物館に収蔵されています。

成田山では伊能図と同時に『住吉物語』『佐倉城下の図』が収納されましたが、受入記録がないそうです。成田の宇宙堂（今はない）が持ってきたが、当時（戦前・昭和十五年頃）のお金で伊能図・八枚組で一〇〇円位だったのではと言われています。三点は堀田家の品というだけで、黙って記録も残さずに引き取ったのでしょうか。

## 二、英国に伊能小図を訪ねて

英国海事博物館には挑戦して門前払いされました。海外視察の途中で英国小図閲覧を思いたち、ロンドン見物を中止して、通訳を雇って海事博へとテムズ川を船でグリニッチに向かいました。通訳が学校の先生だと言って申し入れてくれましたが、一週間前に予約しないとダメと言われる。

仕方がないので学芸員の名前を聞いて帰り、手紙で写真を申し込みました。モノクロだけでカラーはなし。四×五インチのカラーポジを購入。これで地図の存在は確認できました。

その後、もっと大きい八×一〇インチのポジをとってもらいました。グリニッチには「伊能小図」が蝦夷地・本州東部・西南部と三枚ありますが、当時、日本には二枚しかありませんでした。そこでこのポジは江戸博の図録などでは大活躍しました。

英国国立海事博物館 National Maritime Museum はテムズの河口にあり、ダートマス兵学校の隣、グリニッチ天文台の隣にあり対岸はドックヤード。地図は英海軍水路部所有で海事博で保管中です。

○後日談 一九九五年八月、江戸博に「伊能忠敬展」を提案、小図の所有者である英国海軍水路部に借用を打診した。このときは断られたが、一九九五年十一月に江戸博開催内定とともに、企画委員の肩書で借用を申込み内諾を得ました。これを朝日新聞が引き継いで江戸博に招請、一三七年ぶりの一時帰国が叶ったわけです。展覧会に先立ち、家内と海事博を訪問し、地図を実見調査しました。「英国小図」には針穴はなかったですね。幕府旧蔵がはつきりしているのに写本でした。

### 三、フランスに伊能中図を求めて

一九九四年、日経新聞に「私の民家で日本地図発見」という記事が掲載されていることを清水靖夫氏から聞きました。仏人が「家にこんな地図があるが見てほしい」ということでした。

新聞が報道する以前に国土地理院に問い合わせがあり、地理院は地図の存在を知っていたのですが、ちゃんと調べようという気にならなかったようです。清水氏がこれを新聞社に話したので報道となった。私は一九九七年になってこの記事を見ました。

その後の展開は次の通りです。一九九四年の日経新聞の記事を見る↓金窪元地理院長ルートでペイレ氏のアドレス判明↓手紙を出す↓来週はいいよ、と伝言あり↓学友の娘さんを通して延期を願う↓アボを

とる↓自宅のマンション管理組合役員の朝日OB（モスクワ・ボンの元支局長）からバリ支局長清水弟氏を紹介される↓支局のアルバイトさんを三万円で通訳に雇う↓イブ・ペイレさんの息子夫婦（東京在住）を八方園の食事に誘い事情を聞く↓ペイレ博士はグランゼコールの元教授で息子三人、娘一人。自宅はバリの空港に近い場所ので一七世紀の家だった。裏庭が奥深かった。

○フランス中図は最高級の中図 地図を一見し、国会図書館の堀田小図と同じくらい驚きました。「針穴」が完全に残っています。

記述が詳しい。地図記号が充実。特に東博に記入がない天測地星印がある。完成度が高く、八枚揃っている。等々です。中図で完全に揃っているのは東京国立博物館、成田山仏教図書館、ペイレ氏蔵が三大中図と言えるでしょう。

地図が発見された別宅は夫人が親から相続したもの。母親が存命中は建物をいじらず、死去後に整理していて地図を発見したとのこと。いろいろ聞きましたが来歴は不詳。別宅の所有者は、夫人の親は学校の先生、その前は蹄鉄工、その前は公証人だそうです。

保存状態が良好だった理由は屋根裏で通気が良かったことと、人の手が触れずにいたことでしょうか。

帰国後、佐原市教育委員会・香取次長に地図展の開催を提案、香取氏の市長説得で実現しました。イブ・ペイレ氏が東京在住の息子の許へ孫の顔を見に来る旅費の一部を援助し、中図の持参をお願いしました。地図展は金・土・日で入場者数三、三〇〇人を数え大成功。伊能忠敬研究会も発足しました。

○フランス中図はなぜ海を渡ったか 榎本武揚が伊能測量隊員箱田良助の二男であることはご承知と思いますが、彼が幕府艦隊を率いて函館に脱走したとき、軍事顧問団のフランスのブリュネ大尉らが同行し

ていた。敗戦、そして引き揚げのとき仏人が謝礼がわりにもらって帰ったのではないだろうか。榎本らは蝦夷地の開拓をさせてくれと願っていた。地図を持ち出した可能性は大きいのです。

敗戦後、せめてこの地図を、と言って渡したのではなからうか。ブリュネは後に將軍になったし、団長のシャノワン大尉は陸軍大臣になっている。シャノワンの父は、そう離れていないデジョンの法律家だったから、非公式に受け取った地図を、公証人にそつと預けた可能性はあるでしょう。ミステリーであり、ロマンです。

○ペイレ図ぼろぼろ 展覧会借用のため、ペイレ中図を再見したのは、二〇〇三年五月二一日でした。大きいので近所の集會室に運び破損部を撮影しましたが、地図がボロボロなのにはびっくりしました。

日本に帰って当時地理院長だった星埜さんに相談しました。名案がなく、「マスコミで公表したら？」ということになりましたが、たまたま共同通信の橋田氏より電話があり、「何か面白いことは？」というのでこの話をしたところ、すぐ記事にしてくれました。

京都新聞が取り上げて、京都の日本写真印刷より來会し「修復をやらせてくれ」との申し出がありました。ただし版權は欲しいということでした。修復のため地図を持つてペイレ氏が來日し、修理後、展覧會を開催。日本写真の會長から「条件が合えば買い取りたい」という話があり、皆様のお世話になって、売却意志確認、価格交渉の手順を踏み、ギリギリで決着しました。大変よかったですと思っています。

#### 四、第一次伊能ウオーク

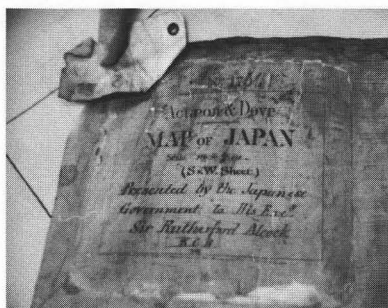
最初の伊能ウオークは、ウォーキング協會が独自に企画したものでした。江戸博で伊能忠敬展をすることになってから、忠敬展が後押し致しました。我々が八月に企画提案したとき、当時の児玉幸多名誉館

長が、よく知っていて推してくれたと聞いています。十一月に内定通知を受けました。

俳優座があとから「実はウチも考えていた」と言っていました。加藤剛が考えていたようです。彼は忠敬ファン。

○英国小図の借用 英国に小図の借用申込みをしたとき、海軍水路部より回答がありました。「複製でよろうか？」と。「ダメ。日本には本物が二枚あるのだから」と言つてやる。私の本の出版パーティー席上で、朝日新聞の幹部に「江戸博の目玉が必要。是非借りるべきだ」と話して流れを作りました。後から、条件としてビジネスクラスで付き添い要員二名、引き取りは一名というような話になり、歓迎会もやりました。ということで江戸博展の目玉として「グリニッチ小図」を展示することができました。ところで英国の小図を見に行つたときに、真つ先に地図の裏に張つてある「Presented by the Japanese Government」というシールを見せられました。返せといつてもダメだぞという意味でしょうね。

(丁)



「グリニッチ小図」裏のシール



グリニッチの英国海事博物館



## 伊能塾講座

第三回例会（一月十八日）再録

○講演「学習院大学図書館蔵伊能中図を見直す」講師・斎藤 仁さん

### 一、はじめに

学習院大学図書館蔵「伊能中図」は昭和四四年に元学習院女子部教授堀米次氏によって寄贈されたものであるが、学習院では年一回虫干しをするという方法で一般に公開している。この地図は昭和四六年に元都立大学教授の保柳睦美氏により「特殊中図」として紹介された。この地図にどんな特徴があり、何故に「特殊」といわれて別格的扱いをされるのか、これからお話していきたい。

学習院の書庫には明治初年に購入した外国地図が二〇〇三〇本あり旧満州の戦略的手描地図など焼けないで残った面白い掛地図もある。この「特殊中図」は八幅あり、もと陸軍陸地測量部が所蔵。陸軍の目録に出ているもので、陸地測量部の解散に際し、焼却寸前のものを友人・山北半次郎氏から堀米氏がもらい受け、死後分散することを危惧した堀米氏の夫人の寄贈により学習院所蔵となったものである。現在は軸装して桐の箱に入れ、図書館の倉庫へ保管している。

### 二、学習院「伊能中図」の内容と特徴

八舗のうち、一〜五は文化元年上呈図である。上呈の時、三枚（北海道、東北、中部）だったものを、学習院が東北と中部をそれぞれ北と南に分けて五枚とした。六は近畿で凡例が貼ってあり、仕上がりがきれいである。七は東北地方で針穴は見えない。地名の載せ方が細密であるという特殊性があり、普通の伊能図ではない。近畿の部の地図上に「陸軍」とはんこが押してあるが、それをまた消してある。もと

もと大名家にあったものが陸地測量部に貸し出されたものかとも考えられるが、真相はわからない。知行地、大名領が実に丁寧に書き込まれている。保柳氏は「江戸後期の字だ」としているが、しかし何時、どんな目的で書き込まれたかは不明である。

以前、中学生にこの図を使って授業をした際に想定外の指摘をされた。下田沖の島々に女の子の名前が並んでいるというの

で良く見ると、たしかに「サク子、ヨシ子・・」と女性の名前が並んでいる。これは「サクネ島、ヨシネ島」と読むのであるが、中学生の見方は面白い。

イタリア伊能図は甲南大学の久武哲也教授（残念なことに昨年死去された）が平成七年にイタリア地理学協会で見つけたもので、学習院大の伊能中図と地名の並び方が同じで全てカナ書きとなっている。

### 三、補足説明―渡辺一郎さん

この「学習院中図」は謎だらけの地図。堀田撰津守と関係があるかもしれない。戦後のドサクサに陸軍が大名家から借りて写したが、その途中でもっと良いのが見つかったので、やめてしまったのか。いずれ大名道具か旗本道具であることは間違いないが、借りたものを返さなかったのは不名誉なことなので陸軍に秘蔵されてきた。ペイレ図や領主名の入っていない中図が宮城県図書館にあるが、米国議会図書館





## 貴重書コレクション

## 学習院大学図書館蔵 伊能図中図について

斎藤 仁(学習院名誉教授)

1. はじめに / 2. 学習院伊能図中図の内容 / 3. 学習院伊能図の特徴 / 4. 明治以降 /  
5. 終わりに / 6. 文献 /

## 1. はじめに

学習院大学図書館に保管されている伊能図(中図)は、昭和46(1971)年、保柳睦美氏が「特殊中図」として紹介されたものである。学習院伊能図は8舗あり、昭和44年4月、元学習院女子部教授堀米次氏の寄贈によるものである。同氏は、これを昭和20年8月、終戦による陸地測量部の解散に際し、焼却寸前のものを友人、山北半次郎氏から貰い受け入手されたとのことである。学習院では早速、装丁を改め、裏打ちし軸装し、桐の外箱を新調し保存の完全をはかってきた。

## 2. 学習院伊能図中図の内容

幕府上程の時期

年	項番	地名	縦 × 横 (cm)
文化元(1804)年	一	蝦夷地(東南部)	119 × 198
	二	陸奥・出羽(北部)	107 × 184
	三	陸奥・出羽(南部)・越後・佐渡	100 × 184
	四	下野・上野・常陸・下総・武蔵 相模・伊豆	113 × 178
	五	能登・越中・信濃・加賀・越前 若狭・尾張・駿河・参河・遠江	123 × 181
文化4(1807)年	六	参河・尾張・伊勢・近江・伊賀 大和・紀伊・若狭・和泉・山城 摂津・丹後・播磨・但馬	120 × 170
	七	因幡・伯耆・出雲・石見・備前 備後・備中・安芸・周防・長門	125 × 154
文化6(1809)年	八	阿波・讃岐・土佐・伊予	99 × 150

以上の8舗で九州の部を欠いている。

九州測量は第七次文化八(1811)年・第八次 文化十二(1815)年で 学習院図はその前で原図の制作時期は四国測量後のものと考えられる。

## 3. 学習院伊能図の特徴

文化元年の沿海地図中図で現在知られているものは、他に伊能記念館、国立史料館、徳島大学付属図書館にしかないだけに貴重なものである。学習院中図は江戸時代後期の写本として考えとしても、針穴は見つからない(裏打ち装丁し直しのため分からなくなったかは疑問である)。

普通は沿海地図の構成は、蝦夷、奥州、中部・関東であるが、学習院中図は奥州を南北に2分して4舗構成になっている。余白には里程標が示され、全体をそのまま2分してある。蝦夷地の部(一)欄外には高橋景保の識語が載せてある。

文化元年の中部の部(五)と文化四年の畿内の部(六)との接合記号のコンパスローズが内陸部におかれ、尾張〈名古屋〉付近から知多・渥美半島が重複して描かれている。とくに浜名湖の描写の詳細に差がはっきり出ている。文化四年近畿の部(六)は平野部にピンク系の彩色が用いられ、美しさが出ている。

学習院図の最大の特徴としてあげられるのが、中図でありながら大図(大絵図)の記載内容が記されていることである。側線に沿う町村名はもちろんのこと、幕府名・大名領・知行所・社寺領など実にこまかな細字で記入されている。東大総合研究博物館の大和地方の部分と比較してみると分かる。この見事な細字(保柳氏は、専門家の意見によるとこの書法は江戸後期のものと推定)で、技術的にも時間的にもこんな細かな記入事項を模写するのは、よほど例外的な必要性があり、諸条件が揃ってできることであろう。例えば、全国の所領を総覧してみたいため、大図では大きすぎるものを編集してみた大きな文字の国名、細密なはずの方位線、コンパスローズなどに粗雑な描き方の箇所があるのも目的が違っていたからだろうか。

近畿の部(六)の端には、沿海地図の凡例、伊能勘解由謹図の識そのままに写した別紙が貼り付けてあり、末尾には安政五年六月、熊谷市兵衛写とある。地図模写年代はもう少し古いと考えられるが、余白と便利さのため貼り付けたのであろう。

中国の部(七)は、九州測量以前のため中国地方の内陸部は空白であり、ややさびしい図となっている。瀬戸内海側の島嶼の間隙をぬって境界を設けたので、図の(八)との接合記号のコンパスローズが貧弱ではあるが描かれている。

#### 4. 明治以降

学習院中図8舗には全て「陸軍文庫」の蔵書印があり、一部に消そうとした跡が残っているものもある。陸軍文庫へどのような経路で入ったか分からないが、陸地測量部にあったのは確かである。先述したように、堀教授が陸地測量部の解散とともに友人(同郷)から譲り受けたことになっている。

関東の部(三)には、鉛筆で精密ではないが方眼線が記されていて、いちばん使用したのであろうかすれた汚れが目立っている。他にも中国の部(七)の一部と四国の部(八)は、伊予北部の松山・今治・石鎚山にかけて、かなり細かな方眼が集散的に記されている。これも決して精密ではないが、明治以降の模写の方法で、この伊能中図より模写しようと試みた証拠である。

当時の動きとしては、陸地測量部で三角測量を開始したのが明治16(1883)年であり、それまで当面の必要に応ずるには伊能図に頼るほかはないと考え、明治5年に伊能家から大・中・小図の副本その他の資料を借り出している(当時の工部省測量司の名で借用証書が提出されている)。そして内容の不足部分は天保図などで補い、模写をはじめている。明治11~12年に伊能中図と同一縮尺の軍管図、第1~6軍管区ごとに編修している。しかしこれはもともと陸軍の応急使用のためのものであり、一般社会の利用に供するものではなかったので、明治17年から軍管図よりさらに精密な輯製20万分の1地図一色刷の作製にかかっている。一方、海軍水路部でも伊能図を内務省地理局から借り出し模写し、その精密な海岸線に基づいて、海図の作製をはじめている。本図も写図の候補であったかもしれない。

#### 5. おわりに

以上のような伊能図の利用と貸借関係はよく分からないが、学習院中図が戦前の陸地測量部にあったことはおそらく、どこかの大家にあったものが、明治年間に貸し出され、そのまま返却されずに置かれ、終戦直後の混乱により焼却されようとしたものであろう。

甲南大学の久武哲也教授が平成7(1995)年12月、イタリア地理学協会所蔵の日本地図コレクションを調査された際、伊能図を発見され、その構成が学習院中図に似ていることから、本特集関係者の渡辺一郎、清水靖夫両氏とともに来院調査された。その結果、図幅構成はピッタリ同じであった。写真照合では、地名が、位置はそのまま、国名、郡名まで全てカナに置き換えられていた。学習院中図と原図を同じくする伊能図のカナ書き版がイタリアにあったということで興味深い。

## 文 献

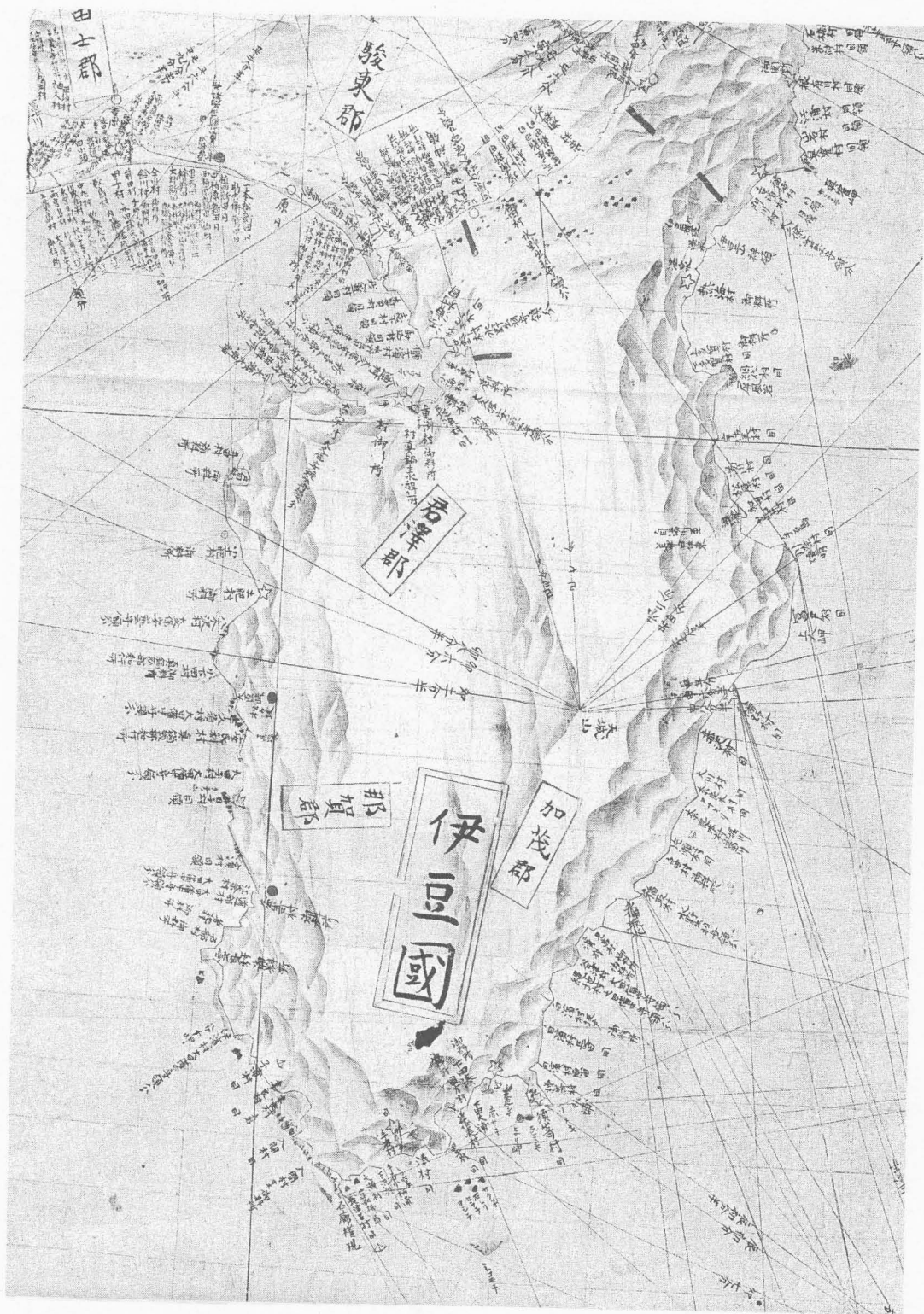
- ・ 保柳 睦美、伊能忠敬の科学的業績、古今書院(1974)
- ・ 斎藤 仁、伊能図について：学習院所蔵伊能中図、地理の友、東京都私立地理教育研究会(1974)
- ・ 斎藤 仁、大日本沿海実測図(伊能図)について、学習院女子部論叢(1993)
- ・ 斎藤 仁、「伊能図のたどった運命」、歴史読本(1994)
- ・ 斎藤 仁、私は学習院大学図書館に眠っている「伊能忠敬図」です、学習院広報(1994)
- ・ 斎藤 仁、謎を秘めた学習院伊能忠敬測量の日本図：イタリアで発見された図、学習院広報(1997)
- ・ 渡辺 一郎、学習院大学図書館所蔵伊能中図について、月刊古地図研究、vol.301(1997)
- ・ 斎藤 仁、渡辺 一郎、忠敬と伊能図、東京都江戸東京博物館図録、アワ・プランニング出版(1998)
- ・ 斎藤 仁・正井 泰夫、「地図の達人」(学習用ソフトウェア)、三菱総合研究所(1998)
- ・ 斎藤 仁、大日本沿海実測図(伊能図)について(2)、学習院女子部論叢(1999)

や成田山図書館の伊能図と同じで出自が不明。何か事情があると思う。鈴木純子さんが愛用していた国会図書館所蔵の堀田撰津守の地図は戦後出た例で、終戦直後に運び込まれた。学習院の伊能図は齋藤先生が番人だから先生が一言言えばOK、簡単に借りられる？学習院の元学長・小倉芳彦先生は「地図を広げると傷むから大切に保管するように」と言っていた。現在は間に和紙を入れてゆるく巻いて桐箱へ納めているが、白手袋をはめて扱うようにしている。

蝦夷地と北東北が欠けているのは、仙台藩が出兵したときに持ち出したかと考えられる。仙台図のほうが色彩が明るい、やや漫画チック。学習院図の方が落ち着いていて良い図だと思う。

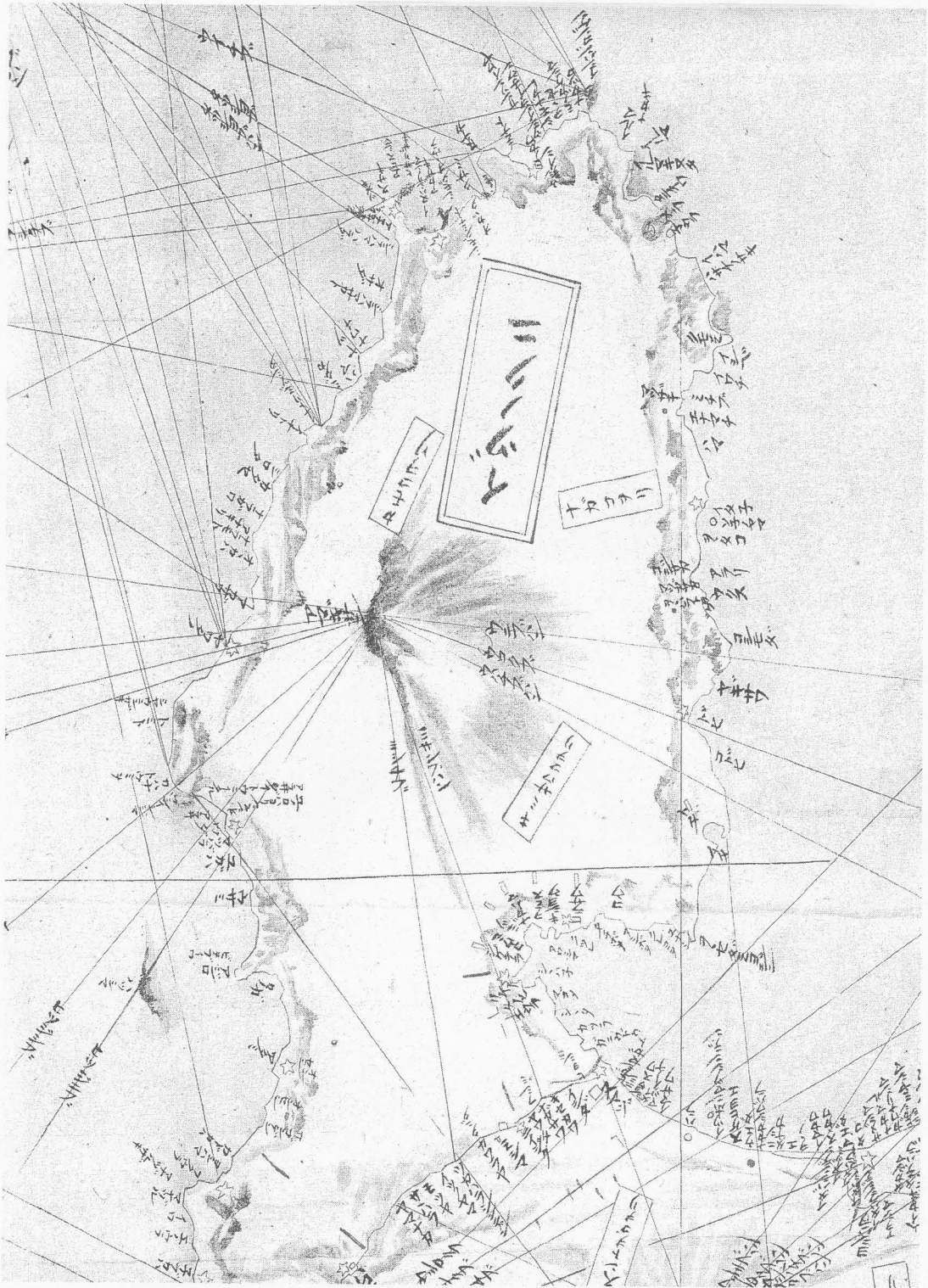
文化元年中図を三枚に写したのは、地図ができ上がるまでに十数年かかっている、待ちきれなかったのかもしれない。(平戸藩の場合は入手までに十数年。頼んだ藩主はすでに死去していた。)「今あるところまでいいから作ってよ」ということだったのではないか。

イタリア中図は学習院中図が原図だろう。久武氏から写真を見せられたときに、「あ、これは学習院のカナ版だ!」と思いましたね。それでイタリアに見に行った。このイタリア図だけがまだ来日していない。イタリアの初代駐日総領事ロベツキが日本人に写させて持ち帰ったのだが、写した者が絵師というほどの技量ではないので、写図・写本というレベルではない。忠実に写したというわけでもないから、地図としてはなく極東事情として持ち帰ったのだろう。なお、イタリア地理学協会はローマのコロッセオ近くの公園にある立派な建物である。



学習院大学図書館所蔵 伊能中図





イタリヤ地理学協会所蔵 伊能中図

九州支部だより

平成二〇年度九州支部研究旅行

Ⅱ「対馬・元禄国絵図」を見学Ⅱ

中 富 道 利

九州支部の毎年の行事として行っている伊能図ゆかりの地を訪ねる旅を、今年は長崎歴史文化博物館で開催されている「宝の島・対馬展」に展示されている「対馬・元禄国絵図」を見学することになりました。

平成二〇年一〇月一二日（日）一行七名は長崎駅で集合し、時間の関係で丸山周辺を散策することになりました。以前長崎で勤務されたことのある野田さんの案内で、駅前から市電に乗り、思案橋で下車して丸山の花街の坂道を上り下りしながら散策しました。長崎検番も健在で二階の手すりに一九名の名入り提灯が下がっており、いまだ芸者さんが現役で頑張っているようです。「なかにし礼」の「長崎<sup>しほく</sup>ぶらぶら節」の文学碑（本人の直筆とのこと）などもありました。卓袱料理で有名な「浜勝」でささやかな昼食をとりました。

食事が終わってタクシード長崎歴史文化博物館へむかいました。

博物館では学芸員の案内で館内をつぶさに見学し対馬の文化財について説明を受けました。お目当ての国絵図（タテ三七四・六センチ、ヨコ一七五・〇センチ）は初公開とのことでしたが、その大きさに圧倒されました。あまりに大きいため対馬では展示する場所がなく、公開していないようです。伊能図以前にこのような精密地図を作った対馬藩の測量技術の高さには感心しました。

博物館には長崎奉行所も復元されていて（奉行所跡に博物館が建てられた？）日曜日のためボランティアによるお白洲の裁きの寸劇が行われていました。犯人役の人は石のゴロゴロした白洲のむしろに座ってお裁きを受けていましたが、かわいそうになりました。

（なかとみ みちとし・九州支部）



昼食 「浜勝」にて

参加者（後列 左から）石川 宮地 松尾（紀） 平川  
（前列 左から）井上 中富 野田

お知らせ

例会案内・例会報告（第三回・第四回）

■第三回例会（一月例会）一月十八日（日）実施

○講演「伊能中図学習院図を見直す」

講師・齋藤 仁さん

（講演内容は六四頁以下に掲載されています）

◇今年最初の例会には十六名の会員の方がお越しくださいました。

講演は齋藤仁さんが「伊能中図学習院図を見直す」と題して大型写真を持ち込み説明していただいた。



イタリア地理学協会蔵の中図が学習院大学蔵のものと地名記載の並び方が似ていること、学習院図の下田沖にある島名が「ヨシ子・ヒラ子・サク子」と女性の名で記載されていることを指摘された。終了後は富岡八幡宮を参拝、銅像を見つづ九名でミニ新年会を行った。（例会担当・新沢義博）

\*\*\*\*\*

■第四回例会（三月例会）三月八日（日）実施

○展示見学「静嘉堂文庫の古典籍 第7回 古地図の楽しみ―江戸時代の町を歩く―」伊能図『カナ書き特別小図』ほか（講演なし）

◇第四回例会には十四名が参加。シーボルト所持本の副本として作成された可能性のある『カナ書き特別小図』は一舗構成、大槻家の蔵。現存する特別小図は数枚のみ。司書の成沢さんの案内で一時間三〇分の見学。今後は例会の一環として記念碑探訪もしていきたい。（新沢）

（次回例会のご案内）■第五回例会

○日時・会場・内容（未定） 決まり次第お知らせします。

二〇〇九年度 総会のご案内

○日時 二〇〇九年七月五日（日） 十三時三〇分～（予定）

○会場 富岡八幡宮 ○三―三六四―一三三五

（東京都江東区富岡一―二〇―三） 【別途通知参照】

完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 東京（深川）

伊能測量二一〇年を機に各地で計画されている伊能忠敬ゆかりのウォーク。これと並行して、原寸大に製作した伊能大図・中図・小図の複製を一堂に展示する巡回フロア展を各都道府県で開催します。

まず全国に先駆け、忠敬ゆかりの深川で左記の要領で開催します。

【日時】4月11日（土）・12日（日）9～17時（入場16時30分）

※一般内覧会 4月9日（木）時間注意・10日（金）9～18時

【入場】開催協賛券 大人 五〇〇円 小中学生 一〇〇円

【会場】江東区深川スポーツセンター（江東区越中島一―二―八）

【交通】地下鉄東西線門前仲町徒歩10分 ○三―三三八―二〇五八八一

【主催】伊能忠敬研究会【共催】江東区・（株）日本ウォーキング協会

◆伊能研究会内覧会のお知らせ（予定）

4月10日（金）14時 フロア展会場入口付近集合



## 日々の話題

■TV番組・二月二七日NHK「そのとき歴史が動いた―江戸の世に挑んだ男たち―伊能忠敬・間宮林蔵・ジョン万次郎」が放送されました。

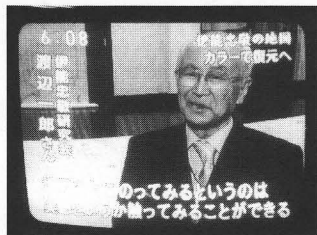
■TV出演・芳賀啓さんが二月二七日深夜放送テレビ朝日「タモリ倶楽部」(テーマ・桃栗三年 崖一〇万年 国分寺崖線をゆく!)に出演しました。



■TV報道・渡辺一郎さんが一月九日のニュース番組に登場しました。

■新聞記事『読売新聞』一月四日「編集手帳」で伊能忠敬の生涯と仕事ならびに「伊能大図」の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

【概要紹介】富岡八幡宮の伊能忠敬の像は旅の



の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

【概要紹介】富岡八幡宮の伊能忠敬の像は旅の

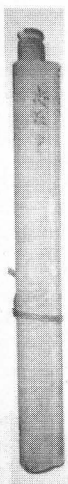
の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

の復元・全国巡回展示が取り上げられました。

の復元・全国巡回展示が取り上げられました。



## お知らせ

◆静嘉堂文庫美術館03・3700・0007  
◆「静嘉堂文庫の古典籍 第7回 古地図の楽しみ―江戸時代の町を歩く―」  
展示品 伊能図『カナ書き特別小図』ほか

## ■伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118

### ◆第60回収蔵品展

期間 1月20日(火)～3月22日(日)  
展示品 伊能図・関東・中国地方、奈良県  
付近、半円方位盤 など

### ◆第61回収蔵品展

期間 3月24日(火)～5月24日(日)  
展示品 伊能図・琵琶湖・厳島・佐渡、携  
帯用磁石 など

### ◆『伊能家のおひなさま展』

期間 2月7日(土)～3月22日(日)  
展示品 伊能家に伝わるおひなさま2組  
(同時期に佐原市内各家々でもお雛様を公  
開します。古き良き街並みと合わせてご覧  
下さい。)



## 受贈

■平成20年度企画展展示図録『利根川下流域の  
和算文化』千葉県中央博物館大利根分館刊  
首藤郁夫さんより御恵贈いただきました。



## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方とはなたでも入会できます。  
二、つぎのような活動を行っております。

### ①会報の発行

発表誌 原則として年四回

### ②例会・見学会の開催

《会報》—原稿締切と発行予定—  
第56号締切3月末 発行5月  
第57号締切6月末 発行8月  
第58号締切9月末 発行11月  
第59号締切12月末 発行2月

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。  
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合、は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務局が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変更しました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご二任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしています。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadaka.org/>（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.ttrm.or.jp/koko>

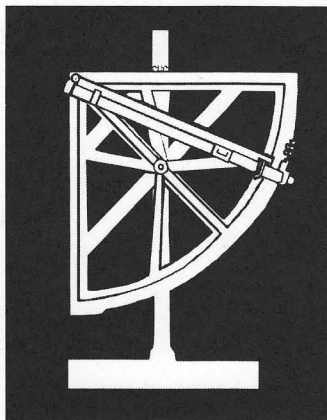
### 編集後記

◇忠敬先生はどんな性格だったか。成し遂げた偉業と肖像画からはやはり「謹厳」「根気強い」など、超人的な精神力の持ち主のイメージが強い。◇しかし「伊能はご存じの性格で、そこなので安心がでない。」と師の高橋至時は手紙に書き、昨年話題になった『石井記録』では「やたら元気でちよっとほら吹き」「意外にキレやすい気分屋」と、謹厳とは異なる人間像が垣間見える。◇杉本苑子『江戸散華』（昭53毎日新聞社刊）所収の随筆『愉快なじいさま伊能忠敬』は三〇年以上も前の作品であるが、忠敬の人間的な面を看破していて異色である。◇杉本「みずから『楽天斎』と称していたように、忠敬は一面、ユーモラスなじいさまだった。包容力を持ち、だけれからも慕われ、したしまれた。（中略）生涯をとじるまで、みずみずしい活動をやめなかったその愛すべき人間像に、私は心からなる拍手を贈りたい。」◇忠敬先生の偉業を生み出したのは「謹厳さ」よりむしろ並外れた「明朗闊達ぶり」の方だったかもしれない。（M）

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.55 2009



### TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (5)
- Place Names Related to the Year of Ox
- Tadataka's New Year's Letter
- Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps" in Tomioka Hachimangu
- "The 10th Inoh Walk Anniversary" was Held in Tokyo
- New Materials about Inoh Survey was Found in Gifu

- Inoue Tatsuo 1
- Saito Hitoshi 2
- Editorial Department 3
- Editorial Department 4
- Editorial Department 5
- Editorial Department 6

### TOPICS II

- Report of Study Trip to "Mitarai, Nakajima, Kure"
- Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (9)

- Yanoh Akira 9
- Hoshino Yoshihisa 12
- Inoh Yoko 24

### FROM VISITORS' REGESTERS

### ARTICLES

- Inoh Survey Team's Lodging in Choshi was Soy Sauce Brewery
- Study of Inoh Tadataka (5)
- Revision of Kan Chazan's Poem
- Kashiwagi Family Documents Deposited with National Museum in Sakura
- The Separate-volume of Tadataka's Survey Diary

- Sakuma Tatsuo 26
- Ishiya Haruka 30
- Editorial Department 38
- Kashiwagi Takao 39
- Sakuma Tatsuo 48

### INOH-JUKU

- People of the Inoh Family
- My History of Discovery of Inoh Maps
- "The Medium-Scale Inoh Maps" in Gakushuin University

- Inoh Yoko 56
- Watanabe Ichiro 60
- Saito Hitoshi 64

### BRANCH REPORT

- Report of Kyushu Branch Study Trip in Fiscal Year 2008

- Nakatomi Michitoshi 70

### MEETING ROOM

- Regular Meeting Guide and Report
- Letters from Members Daily Topics and Informations

- Shinzawa Yoshihiro 71
- Editorial Department 72

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY